

## 潟の伝承・書籍調査報告2

高橋 郁丸 協力研究員／新潟県民俗学会

### 1. はじめに

潟の伝承を調べるにあたり、昨年に引き続き書籍から水辺の伝承にまつわる部分を抽出した。今年度は140話ほどピックアップできた。ここでは原典の内容を変えずに文章を要略して紹介する。古い書籍では現在残っていない地名も出てくるため、可能な限り推定して記述する。

この報告を目にした方に、昔日の湖沼の様子を知っていただけたらと思っていたが、伝承を調べながらぜひ若い方々にも知っていただきたいと感じるようになった。湖沼と語り合いながら暮らしてきた先人の苦勞と思いを感じていただければ幸甚である。なお、出典の違いにより内容に矛盾が生ずるものもあるが、ここではそのままご紹介する。

### 2. 潟の伝承

#### (1) 福島潟

##### ・紫雲寺潟とお福

紫雲寺町（現新発田市）に紫雲寺潟という大きな潟があった。潟のそばに紫雲寺という寺があったことから潟の名となった。美しい小僧が住んでおり、夕方になると小僧のつく鐘の音に村の娘たちはうっとりした。村に真野長者という長者がおり、お福という一人娘がいた。お福も小僧に思いを寄せていた。ある日、お福が鐘つき堂にひそんで小僧に思いを告げたが、小僧は「私は仏に仕える身」と逃げ出したので、お福は半狂乱になって後を追ひ、潟の畔で立ちすくんでいる小僧を小脇に抱えて潟の中へ飛び込んだ。その夜から降り出した雨は七日七晩降り続き、七日目の晩に近くを通りかかった人が、潟の中で小僧をくわえた大蛇を見た。お福は大蛇になったと噂された。その後、紫雲寺潟は干拓されて狭くなったため、住めなくなったお福は隣の潟に移った。そのためお福の名を一字とって「福島潟」と名づけられたという。（新潟県伝説の旅）※紫雲寺潟干拓は享保年間（1716-36）である。

##### ・お福の願い

新発田藩が幕府の許可を得て福島潟の潟端開田事業を起すことになった。頸城郡鉢崎の山本丈右衛門も開田請負を願出た。丈右衛門は沢山の夫を雇い、潟の周りに長い土堤を築いたが、春先の雪解水や梅雨時の長雨の出水で土堤が崩れた。今年こそは崩れぬようと太い棒杭を土堤に打ち込んで土留めを補強していたが、梅雨時にまた堤防が崩れそうになったので、丈右衛門は土堤を見回り、崩れそうなところは大きな杭を打ち込んで破堤を防いだ。雨の日の夕方、いつものように丈右衛門が土堤

を見回っていると、雨に濡れた若い女がいた。女は「私はお福と申して、この潟に住んでいる主の大蛇です。このたび大きな杭を躰に打ち込まれて苦しんでいます。どうぞ杭を引き抜いて私を助けてください」と哀願した。丈右衛門は気の毒に思ってお福の願いを聞いてやろうと思ったが、堤防の外で縁に波を打っている青田が水に押し流されて、人々の苦勞が水の泡になることを思うと、お福の願いを聞くことができず、飯山の仮住居に帰った。丈右衛門はその後、飯山にお福のため福音寺を建てて、その冥福を祈ったという。（新潟県伝説の旅）福島潟干拓は宝暦年間（1751-64）

##### ・うわばみ（大蛇）

福島潟の東南の岸新田（不詳）の大きな農家の下男が草刈りのついでに芦原の茂る淵で釣りをしていたところ、川の水面に7mほどのうわばみが出し、下男に向かって真っ赤な口を開いた。下男は驚きのあまり逃げ帰って寝込んでしまった。（北越奇談）

##### ・うわばみ

葛塚は福島潟の西で、福島潟からたまり水を阿賀野川へ吐流する濁川という狭い掘割川がある。その広さは36mほどだが深かった。町の端の大曲という淵はことに深く、冬から春まで白魚は夜ごとにたくさんとれた。しかし、四網漁をしようとする水底よりその網を引っ張り、ことごとく破りつくしたので、三網以上は漁をしなかった。ある晴れた日、川水がにわかに逆巻き、左右の堤があふれて漁舟を覆した。そして網を破って流れに従って一里余り下ると水底に沈んだ。それを見ていた両堤の村々の農夫漁人は棹を捨て鍬を投げて逃げた。「うわばみだ」と噂し合ったが、一人としてその正体を見た者はいなかった。（北越奇談）

##### ・オオニュードウ

潟の近くの田の水路でエビを獲っていたら、後ろに長袖の棒縞の着物を着た大入道が現れ乗りかかってきた。狐がムジナ、カワウソの仕業であった。（豊栄市史）

##### ・水死亡霊塔



かつては浜茄子新道と呼ばれた県道豊栄～天王線に葛塚龍雲寺 11 代秀外天明和尚によって天保 14 (1843) 6 月に建立された石塔が立っている。対岸の豊浦や笹神へ渡るのに、突風に見舞われた舟が転覆して、水死する人が多かったので「龍雲寺の僧と供の者 13 人が溺死した」「天候の悪い夕方など、水死者の亡霊が舟ばたを押さえて沈めようとする」「髪の毛が三本動いたら渦を渡るな」などと語り伝えられていた。雨のそば降る夜は鬼火が渦の上をさまようので、天明和尚が水難亡霊者の供養をして亡霊を慰めるためにこの「水死亡霊塔」を建立、大供養を行った。(豊栄市史) (とよさか歴史散歩)

#### ・福島渦に沈んだ鐘

京ヶ瀬村金淵に、善照寺という寺があつこの寺の鐘楼に下がっている鐘が「福島渦へいごん、いごん」と鳴り響き始めた。あまりうるさいので和尚が「そんなに行きたけりゃ行け」とどなりつけると、鐘はそのまま地面に落ちて、動き出した。その通った跡が前の川になり駒林川になった。鐘が途中で止まって一服していると、そこでオシメを洗っていた女がしばたばかりのオシメを置くと、鐘はオシメをひっかけたまま福島渦へ向かった。女は驚いて追いかけたが、鐘はオシメをかぶったまま福島渦に沈んだ。時々鐘は水面に浮かび上がったがオシメをかぶったままだった。その後、寺は水原の領主に乞われて水原山口に移った。善照寺があつた後は寺屋敷、鐘が沈んだところは鐘淵と呼ばれた。(新潟県伝説の旅)

#### ・引っ越したお福

福島渦も開墾が進み、お福は鳥屋野渦に引っ越した(中央大学民俗研究会「新潟県豊栄市調査報告」1983)

## (2) 内沼渦

### ・カワウソ

内沼渦に舟を出すと、舟を非常に強く叩くものがいた。これはカワウソが尻尾でたたくのであろうが、何者かはっきりとはわからない。魚取りをしていたらきれいな姉さがあがっていたことがあった。これはカワウソの化け物だったという。(豊栄市史)

### ・狐

内沼沖の大水門前のリュウモチゴヤ(ヨウモツゴヤ)で水を割って網をおろしているところへ、嫁に行った娘が帰ってきた。娘は網を下してその周りを回ったと思うと積んでおいた雪に滑って穴に落ちた。様子がおかしいので取り押さえてみたら魚を狙っていた狐であった。(豊栄市史)

### ・ミノムシ

秋、渦へエビ漁に行つて雨にあうとミノムシが出る。ミノムシというのはミノのしずくが光って火のように見える現象。蛍の光より強い赤光をしていて、傍らの者には見えるが、本人にはわからない。光に気づき、あわてはたとくどと広がり、発光したしずくが飛んでほかの人に

移ることもある。害はないが、ミノムシのために渦の中で方向を見失う人もあつた。(豊栄市史)

### ・ムジナ

渦にザイ(氷)がはつた時、ムジナが出たので退治して舟の中に入れておいた。後で行つてみるとムジナの姿はなかつた。昔から、水に飛び込むのはカワウソとムジナであると語られていた。(豊栄市史)

## (3) 鳥屋野渦(及び清五郎渦)

### ・竜灯

竜灯があがるのは初秋の小雨の降りだしそうな晩。神道寺寄りの鳥屋野渦の真中あたりに花火の四五寸玉位のもものが五、六発あがる。竜灯はあまり高くあがらず、花火のように音もないので気味が悪かつた。(鳥屋野地区の今昔)

### ・鳥屋野渦の主

鳥屋野渦の主は大鯉で、十数尺もあつてお化けのようだという説と、大ドブ貝だという説がある。(鳥屋野地区の今昔)

### ・鳥屋野渦の大亀

渦には畳八畳くらいの大亀がいる。大亀は橋が架かっている紫竹の方へは橋げたに引っかかって通れないので、いつも一本松のあたりにいた。一本松には地藏様が祀られている。その岸辺はいくつもの波がぶつかりあうところで大舟がよくひっくり返るところだからだという。(新潟市史民俗編 I)

鳥屋野渦の主は畳二枚くらいの大亀。暑い夏には渦に浮いて甲羅干ししている。通りかかった船が古畳だと思つて流してやろうと竿の先でつかけるとジャポンと頭を持ち上げ真っ赤な口を開けて金色の目で睨んだという。鶉の子の主は白蛇で、清五郎を通つて渦に入るといふ。鶉の子の主が通ると翌日は雨になるという。(にいがた夜話)

### ・白山亀と鳥屋野亀

新潟の白山様の土手のはずれに淵となつてよどんでいるところがあつた。そこには白山亀が住んでいた。白山亀は畳一枚ほどある甲羅に青苔が生えている亀だった。水泳している子どもや大人が亀に引き込まれ、尻こ玉を抜くという悪さをした。鳥屋野渦の亀の甲羅は畳六畳ほどだった。鳥屋野渦の亀は農家の人が馬や牛を渦に洗いに行くとき引きずり込むことがあつた。鳥屋野渦の亀は女池のおタマ亀や男池の三平亀などを手下にして春先から初冬まで我が物顔にのし歩いていた。白山亀は鳥屋野の亀に戦いを挑むことがあつた。白山亀は小さいので勝ち目はなく、いつも逃げた。鳥屋野渦の亀は後を追うが紫竹の橋杭に甲羅がつかえて通れなかつた。(にいがた夜話)

### ・三平池の大亀

池の主様は大亀だという説がある。その主の大亀は畳

三四枚ぶんもあってうまの頭ほどの首頭であると、見た人もかなりある。春秋の土用の季節には一晩の真夜中に大掃除をしてあくる朝には岸辺二尺余りの稲架場の上まで芦の根や水藻など打ち上げ、池の水は気味悪いほどに大濁りで深い箇所半分だけで浅い半分は何もないのであまりにも神秘的であった。まれにその場面に遭遇した人もあり、あまりの恐ろしさに多くは語らずにいた。

ある人は池と三平堀の出口との二カ所で四ツ手張りの網漁をしていたら、あまりに漁があるので夜おそくまで続けていたところ、俄かに小魚が無数にはねて泳ぎ始めた。すると急に池面の水が盛り上がり、大波が襲いかかってきたという。あまりの怖さに何も持たずに逃げて帰宅したという。その恐ろしさにそれ以後は漁をやめたという。ある人は秋の夕方、小雨が降りはじめた頃、よく釣れるので長く釣っていたところ蛙の頭のようなのが無数に浮いて来たので、驚いて釣り竿の先で払うと、急に釣り舟を二三尺も押し上げて水にたたきつけられた。釣り人はあまりの恐ろしさに釣り道具も始末せずに堀伝いに逃げたという。

この池は昔小学生たちの水泳の場所であったけれど、あまりに深いので村人と、父兄総動員で一日掛かりでリヤカーで砂を運んで池の岸辺に入れた。漸く午後には池が浅くなったと喜んでいたところ、にわかには砂を池底に押し出し、泡と共に沈下した。その後、昭和三十五年に村の共有面積二町歩余を百五十万円で競売、トラックで埋立を始めたが何ほど多く砂を搬入しても底知れずで困窮した。すると「それは池の大主さまの祟りだから早速お祓いをやったらよい」というので、神官を呼んで「祓」をしたところ、その後は順調に埋め立てられた。池の大主様の大亀は雲を呼んで移転されたとの説である。(鳥屋野地区の今昔)

女池は俗名で、昔は三平池といって三平橋がかかっていた。三平池は五千坪ほどの池で、甲羅が八畳敷きもあるという大亀の主がいた。昼、舟が通ると亀が動いて水を濁らせたり、池の中の思わぬところに島ができたように浮いて舟を乗上げたものもいた。年二回、春と秋に澄んでいた池の水が一面赤く濁り、一週間くらいきれいになった。亀が池を掃除するのだといった。三平池では岸から網を曳くことはできたが、舟で池の中心部に行くと網を入れると必ず網を破られた。三平池は村の共有地で、昭和25年に耕地整理をしたときに池の真ん中に橋を架けようとしたが、亀が邪魔をして架けられなかった。それで「亀祭り」をしてようやく架けることができたという。大亀は橋の上手に住んでいるはずだったが、お寺さんを頼んで御祈祷をもらい池を埋め立てたときにはいなくなっていた。(新潟市合併市町村の歴史 研究報告)

めんめんめん目をつぶらんと 三平池の大亀が  
おっかい(恐い) おっかい顔をして

ねらねい(眠らない) 坊やを取りにくる  
ねんねんころり ねんころり

…三平池の亀の伝承はこのような歌も生んだという。(にいがた夜話)

#### ・三平池のお玉亀

三平池の亀によって舟ごと持ち上げられ船が回船させられることもあった。大亀のいたずらであったといわれる。三平池についてはこのような話も伝わっている。三平池の畔に三平とお種の夫婦が住んでいた。毎年のように氾濫する信濃川の逆流で、一面が海のようになっても、なぜか三平の付近は水がこない。水のひいたあとにはどこからか流れてきた宝物が残っている。稲や作物のできもよく身上は上がるが子宝に恵まれなかった。夫婦は先祖代々の屋敷神に願をかけ、二十一日の満願の日、神様からのお告げがあって子を授かった。その子は女の子で、お玉と名づけられた。三平の家には伝来の立派な唐琴があり、お玉はよく池の畔で弾いていた。すると小波がたつて鯉、鮒、鯰までも浮かれて岸辺に集い聞きほれたという。池続きに京都から来た美しい若者がいた。お玉の琴の音にひかれ、二人は魅かれ合い、両親も許す仲となって祝言をあげるようになった。婚礼の日、お玉が鏡を見ると、その姿は大きな亀になっていた。お玉はそっと抜け出して池の中に身を投げたという。(にいがた夜話)

#### ・鳥屋野潟のカワウソ

鳥屋野潟で漁師が魚をとって岸に船をつけて上がろうとしたらガツボの中から一つ目の大入道が出た。漁師は一目散に逃げたが、後で舟に戻ってみるとビクの中の魚が一匹もいなくなっていた。カワウソのしわざであった。(新潟市史民俗編Ⅰ)

#### ・鳥屋野潟のミノ虫

小雨降る真っ暗い夜、鳥屋野潟で魚をとっていたり、舟で往来していると、着ているミノに突然小さな虫のようなものがついて光る。ミノから振り払おうと払うと払えば払うほど光がますます広がる。これをミノ虫と呼び、ミノ虫につかされるとその人は間もなく死ぬといわれていた(新潟市史民俗編Ⅰ)

#### ・鳥屋野潟の亡者舟

鳥屋野潟は漁師の仕事場でもあり、大切な舟道でもあった。急ぎの船は夜でも行き来した。真っ暗闇の中、舟がやってきてぶつかりそうになり、避けると相手の船も同じように寄せてくる。何度避けても同じ方に寄せてきて、ぶつかると思った瞬間に相手の船が見えなくなる、というようなことがあった。これは亡者舟と呼ばれていた。遭難して成仏できない靈魂が出てくるのだと言われた。(新潟市史民俗編Ⅰ)

#### ・狐婚火

静かな夜稀に提灯あるいは松明のような火が、数十から百、千と、つらなって間断なく遠方に見えることがあった。狐婚火(きつねのよめとり)といった。ある説では

狐やイタチの類が闇夜に口より火を吐くと、その光は火のようだという。かつては潟廻り堤防の上付近には暗い晩に時々狐の嫁入りの堤防行列の長い行列が大正中期までにはよく見られたという。(鳥屋野地区の今昔)

#### ・清五郎の昔のはなし

清五郎を開いたのは与吾平である。謙信さまが死んだ翌年、信長に追われた一向一揆加賀の落人であったと言い、本村・長潟の伊原兵助どん達と一緒に天正八(1580)の開村だという。与吾平は奈良春日神社の神爾をもらって、それを家敷神とした。そのため、祭の日になると奈良から白鹿がお参りに来るのだといった。ある年、鍋潟の鉄砲打ちがその白鹿を撃ってしまった。撃たれた白鹿の姿はパッと消えうせ、鉄砲打ちはバチが当たったのか失明した。その後、春日さまを家敷神とするのはもったいないといって与吾平どんの子孫は明治四十三年に村の鎮守様に合祀させた。

夜中に撞木団地の方を見ると狐の嫁入りが見られた。長潟や鍋潟だの親類の騒ぎに呼ばれると、帰りに揚水機の堀に瀬が出て川の中へごちそうと共に引っ張り込まれた。(にいがた夜話)

#### ・鳥湖橋頭の松



姥ヶ山へ田地開拓を志して来着した百姓津兵衛の植えた松と伝えてきた。樹齢は凡そ300年になる。

この松は見通しの松、奉納の松、弁財天の松、蟠龍の松など、様々な名がつけられた。「見通しの松」の呼称は、阿部一族に伝わる説に依ると、先祖津兵衛はこの松を開拓成就の標として、その開拓地の突端の岬に植えたものであったから。「奉納の松」「遥拝の松」は、後代になって伊夜日子の神に奉納した松であるとか、弥彦の山を望むに良いところにあることから。「弁財堤の松」「弁財天の松」は明治年代山の浦の漢学者伊藤湖村によって鳥湖八景の撰が歌われ、此处を弁天の夜雨としたことから。松が弁財天女の舞い降りるような姿であるからついたものかもしれない。昭和に至って橋の架け替えの時、片側をそぎとられ、戦争時にその頂を伐採されて、監視所に用いられたりしてその疵跡を残している。「蟠龍の松」は、

四方に拡がった枝が文人により『龍枝七間四方に蟠る』等と書かれ、この松枝を伐ると祟りがあると言い伝えられていたから。「一本松」は、鳥屋野潟の岸頭で方角の目標とされ、鳥屋野潟の一本松と呼びなされたから。文人墨客の詩材となり、月の名所であったという。「舟繫の松」とは、夏になると舟を繫いで涼むに良いところであったから。然し大風の時は堤をうち越す大波となって、舟の繫げる所ではなく、その時の舟の避難所は「大縄場」という古い通水門先の、凹所へ逃げて難を避けたという。(姥ヶ山の往昔散歩)

#### ・舟繫松の地蔵さま



鳥屋野潟のほとりにある一古松。鳥屋野潟を渡るものがこの樹を目標として航行し、風雨がにわかにかかることがあれば舟を樹下に繫いで難を避けた。山潟(姥ヶ山)の名主・阿部津兵衛が弥彦神社を信仰、遥拝する場所に植えたものである。ある時、土手を作るのに邪魔だと枝を切り落とした人足が死んでしまった。それは松の下の地蔵様のおとがめであるといわれた。この地蔵は横七番町竜生院の興誉上人とその弟子金子清蔵の二人が、鳥屋野潟で命を落とす人が多いので、その霊を慰めるために建てたもの。地蔵安置の後、水死する人も年々少なくなった。(続・越佐の伝説)

松の根方に祀られてある地蔵様は、文久三年(1863)に清五郎新田小林久平の男、後の新潟市横七番町龍照寺住職開上人の安置した石仏がその創始で、水難消除のため。その地蔵尊像は戦後持ち去られ、現在の仏は長潟

の有志によってふたたび祀られた仏である。最近同所に弁天橋の碑も建った。(姥ヶ山の往昔散歩)

助四郎どんの家は休平どんといい、数代前の休三郎の弟が仏門に入った。休三郎の弟は、修行して洲崎の龍照寺の十四世を継いだ。開嘗上人といった。弁財天の松の木のあたりの下鳥屋野潟で潟を吹きまくる強い風が大波を起し、難船して死人が絶えなかったので開嘗上人が明治の初めころ石の地蔵を供養のため建てた。一度盗まれたので今のものは二代目である。(にいがた夜話)

#### ・蓮潟の主

潟の主は大竜という説があり、初秋の頃、小雨の降りそうな夕暮れに潟の中央より竜灯があがり花火の四五寸玉くらいであまり高くあがらず花火のように音がしないので怖気がして仕事をやめて逃げ帰ったという。(鳥屋野地区の今昔)

#### ・女池尼さの塚

鳥屋野原に小藪になった塚があり、そこに尼さが埋まっているといわれた。塚の周囲を「息をせず三べん回る」と尼さが出てくるといわれた。24坪ほどある塚で、新田家が守っていた。道路普請で土を取った時に土の中から骨が出てきた。(新潟市史民俗編Ⅰ)

#### ・鳥屋野悪五郎

黒鳥兵衛の家来・鳥屋野悪五郎は大力であった。ある時大きな籠に土を詰めて運んでくる途中、籠の目から土がこぼれた。女池の神社や愛宕神社の山や狐山は、その時こぼれた土でできたという。鳥屋野へきて、山王山付近で、窪地に足をとられた。悪五郎は足を抜こうと力を入れたらそこが穴になった。悪五郎は土運びが嫌になって、かついでいた籠の土を捨てた。その土で山ができ、地元の人はこの山を籠ホウロキ山と呼んだ。足跡の山は窪地になり水がたまった。悪五郎が歩いていた時、片足をあげてもう一方の足に力を入れて土を踏んだら、へこんで足の形をした池になった。これが御手洗池である。(新潟市史民俗編Ⅰ)

#### ・石仏山地蔵堂

姥ヶ山発祥の地として語り伝えられてきた。由緒によると大同年中(806)此所を通航の舟人が、小川の庄(鹿瀬周辺)より石仏を奉持して、水難消除の願いをこめてこの丘に祀ったものといわれている。縁起によると、この石仏は行基の作といわれている。姥ヶ山の地は昔、今津の森といって舟の繋ぎ場であった。

このあたり一帯を石仏山と称するいわれは、由緒によると延宝4(1676)に新発田藩の家中溝口祝弥が、新田検分にやってきたときに、石仏を参拝したことから石仏山と名づけられたという。

この山頂に舟を繋いだという大榎があった。この大榎には、白髪の老媪が夜ごとに現れて榎の大股に座って麻苧を紡いでいたとか、親鸞上人が鳥屋野の寺に教化していた時に、石仏の化身が信者の接待に現れたとか、石仏

の靈顯をあらわす話が多く語り伝えられている。

拝堂に祀られている六体地蔵尊は正徳4(1714)年に佐渡で作られたという。宿根木地方より船出し、新潟の港へ渡る時に大きな台風に遭った。祭祀の後、大同年の石仏の靈顯も合わせ供えたと言い、参拝する諸々の人々に功德を授けたと言い伝えている。堂は享保12(1728)に建てられた。御堂の開眼式に用いられたという「まげし」(曲師)の柄杓が残っている。ご利益として、火難の災障。難産を助け、乳を与え、災厄を消除し、総身に汗を滴らせて戒め、火事には裸身となって村を駆けめぐり、屋上に立ちただかって火を防いだ。或る年に厄病の大発生があった。このとき神仏は皆それぞれに災民救済のために巡錫された。羽生田の地蔵尊も巡錫の途上にあつて、栗の木川筋を通りかかられて踵を止められ、「ここから先は姥ヶ山の地蔵があるから委せておけ」と言って折り返されたという話も語り継がれている。

石仏山の地蔵尊にはいろいろの名がつけられた。汗かき地蔵、お化地蔵など災障消除の地蔵尊として崇拜された。天明の御堂は昭和の初めに取り壊されて建て替えられた。お講がつとめられるようになったのは天明の頃から



らと考えられる。その頃の信者は六体地蔵の前にひれ伏して、災障の消除を祈った。明治二十年代までは宗旨の差別なく守護していたが、それ以後は禅宗の人々により講勤めが行われている。現在(昭和60年当時)講中21人、毎月24日は扉を開いて念仏講が勤められている。(姥ヶ山の往昔散歩)

#### ・寺の橋場

バイパスと曾川線の交差するところに「寺の橋」が架けられていた。現在の狭い排水溝は、昔から耕地整理施工時まで、「姥ヶ山の大堀」と呼ばれていた堀河のあったところである。この大堀は昔からの河流の名残であると考えられてきた。明治時代までは橋巾も狭かったが大正初年に道の工事の時、橋巾を広げて架け替えられた。(姥ヶ山の往昔散歩)

#### (4) 北山池

##### ・北山界隈の話

貞享(1685)年ころ、暮らしに困っていた百姓たちを

連れた住職が沼地の多いところを歩いていると、突然池の水が盛り上がり白蛇が首を持ち上げて住職たちを案内したところが北山だった。それから寺号を白竜山誓岸寺といって新田を開拓したのが宝永4（1707）年であった。このお寺の住職は代々学者であり、大変情け深い住持さんがいらっしやう。あやまちで身ごもった娘たちを助けて男の伴僧として面倒をみた。そんなことが二度三度重なったので、「北山の誓岸寺、男猫が子を産んだ」と亀田甚句に唄われるようになったという。（にいがた夜話）

誓岸寺は真宗本願寺派の寺で、本尊は阿弥陀如来。近江の渡辺源十郎盛光が石山本願寺の戦いで一子を失い、名を了玄房と改めて越後に下った。蒲原郡赤渋村（現新潟市南区）に天正11年（1583）玄証寺を開いたのが始まりといわれている。その後、万治元年（1658）に当地に移り、寺号を改めた。（「魅力いっぱい大江山」HPより）

### （5）佐潟

#### ・佐潟に沈む海賊船

佐潟は昔入江であったといわれ、その名残として海賊船が沈んでいるという。沈んでいる一帯は蓮が生えないという。（新潟市史民俗編2）

伝説に依れば、佐潟はかつて入り江であり、その時代の名残として潟の真ん中に船の帆柱があったという。（新潟市合併市町村の歴史 研究報告）

### （6）御手洗潟

御手洗潟は地域の人はミタラセ潟と呼んでいた。赤塚神社があり、参詣者は御手洗潟で手や口をすすいだといひ、御手洗の字をあてた。寛治年間（1087～1094）の地震大津波によって地域が大きく変化し、神社が寂れたという。（新潟市合併市町村の歴史 研究報告）

### （7）ドンチ池

ドンチ池は金鉢状の砂丘湖で年中水がわいている。本来は土地を争ったという意味の「論地」池が正しいともいふ。昔、尼寺があって雨だれがポトポト落ちてこの池ができたという話もある。また、ここには河童がすんでいるともいふ。（新潟市合併市町村の歴史 研究報告）※ドンチ池の河童については5河童伝説に。

### （8）金巻の池

文久三年（今から百四十年位前）、彦治郎家の所に八郎（現在の者とは別）という家があり、オジという若者が盲人の祖母と暮らして居た。当時、村には盗賊が出没し、村を荒らしていた。

ある朝、六右エ門の家の者がにおにわらを取りに行くと、きれいな着物が隠してある。盗賊が取りに戻ってくるに違いない、と見張っていると怪しい男が近付いてくる。捕まえてみるとオジであった。泥棒として捕らえら

れたオジは「着物に目が眩んだだけで、泥棒ではない」と必死に申し開きをしたが、村人は聞き入れず中ノ口川に投げ込むことにした。命乞いをするオジを俵に入れて川に投げ込んだ。一度は沈んだが、オジが俵を破って浮き上がり岸辺へたどり着く。なおも命乞いをするオジを助けてやろうと言う村人も現れたが、仕返しを恐れた村人によって再び縄で縛られ、川へと放り込まれた。今度は、オジの姿は上がってこなかった。

その年、大雨が続き中ノ口川は増水し、村人の懸命の努力にもかかわらず地蔵様の脇の土手が切れた。轟々と流れ込む濁流の中に俵が浮かび上がった。その俵はオジを詰め込んだ俵で、村人の目の前を流れて行った。家や田畑が流されたため、その年の村人は苦しい生活を送った。

水が引いた跡には大きな池ができていた。これが水戸際池で、人々はオジが池の主になっていると信じた。それから後、長い間雨が降りそうな蒸し暑い日になると、池の底から「ウォーウォー」という音が聞こえた。村人は「オジが鳴いているぞ」と恐れたという。（黒崎町史資料編6）（平成9年）

## 3. その他の伝承

### （1）北区

#### ・大亀

阿賀野川の松浜あたりには甲羅の大きさが畳二枚くらいある大亀が棲んでおり、河口で浮かび上がると港に入る船の底に当たって揺れたという。松浜新屋敷の角の深い所に亀が潜んでいるといい、水浴びに行かなかった。（新潟市史民俗編1）

#### ・オオスケコスケ

鮭の精霊、大助小助は人間に化けてミノ・笠を着け、阿賀野川の濁川あたりから信濃川へ移るといふ。その時に河渡でカラタチのクネ（垣）のとげに目を刺して片目が潰れたので鮭には片目がいないか、片方の目が固くないという。（新潟市史民俗編1）

#### ・三ツ屋の虫送り



安政年間（1854～1860）に三ツ屋の阿部次兵衛が、水上安全を記念して阿賀野川堤外地に金毘羅様を勧請し

た。大正年間に堤外地で耕作する村人に恙虫病が多く発生したため、恙虫除けの虫送りが行われるようになった。毎年五月に長戸呂のお行様を司祭者とし、祈祷、御幣を耕地境や堤外地の出入口に立てて回った。ツツガムシ病は治癒法が確立する以前は呪術的方法や神仏に頼ることが多く阿賀野川流域では、三ツ屋をはじめ、大迎、太子堂、高森、森下など49か所で恙虫退散祈願の祭祀が行われていた。金毘羅様の石祠は堤防に祭られていたが、後に三ツ屋八幡神社の境内に遷された。(とよさか歴史散歩)

#### ・大津波

横山(太夫浜霊園のあたり)はドウシャバ(不明)であった。安古左衛門がいたころの太夫浜は横山1000軒、ドウシャバ1000軒、諏訪榎1000軒とあって3000軒の家があったという。それが大津波で皆さらわれてしまった。そのころ船着き場だった新津はその津波の時に砂で埋まったという。太夫浜で多くの人が死に、生き残った人もあちこちに移っていった。安古左衛門の檀那寺は法光院で、津波の後沼垂に移転した。寺のあった所を寺坂という。現在の浄観寺の裏手にあたる。(新潟市史民俗編Ⅰ)

#### ・キノ兵衛地藏様

濁川の川西に近藤キノ兵衛家が世話をするキノ兵衛地藏が祀られていた。日照りの時には夜、新井郷川に架かっている濁川橋の上から地藏を投げ込んだ。雨が降ると地藏を引き上げるといふ雨乞いの行事があった。(新潟市史民俗編Ⅰ)

#### ・古川

濁川の古川跡という小字名は新井郷川が阿賀野川に注いでいた昔の川筋と推測される。(新潟市史民俗編Ⅰ)

#### ・高森薬師如来



昔、高森のあたり一帯が内海であった時代、島には大木がうっそうと茂っていた。日本と唐(中国)との交流の盛んであった41代持統天皇の時(695)、唐の貿易船が暴風に遭った。その時船上にいた唐の高僧良元と舟人が、護持してきた薬師如来に祈念したところ、不思議にも船は風に向かって大波を除け、高森山の麓についた。

その夜の夢に如来が現れ「吾此の地に宿縁あり。永く留まりて来世の衆世を済度すべし。速やかに彼の山頂に安置せよ」と告げた。この言葉を三夜もの間告げたため、船人はやむなく山頂に登って、小宇を結び尊体を安置して去った。今より1300年前より村人が祈願すれば必ず靈驗あらたかで、硯学や名僧が大いに集まって信仰の隆盛を得た。奈良時代から平安時代にかけて大いに繁盛したが、承平7年(937)4月3日の地震津波によって山だけでなく里も埋没した。その後鎌倉時代の初期から室町時代の初期に渡り再び繁栄期を迎え、天下の大寺として栄えた。(岡方の伝承～今昔あれこれ～)

## (2) 東区

### ・伊三池の話

伊三池は山木戸と牡丹山の境にあった。信濃川の和田の土手が切れたときに、信濃川の水がここまで押ししてきた。水は高い所を通過していた山木戸の道に遮られていたが、道を破ってしまい、池になった。(新潟市史民俗編Ⅰ)

山木戸善兵衛の家の伊三というものが6月1日に裸馬に乗って池の前を通ると馬がまっしぐらに池の中に走りこんだ。馬は戻ってきたが伊三は池の主の蛇に見込まれたのか浮かんでこなかった。同村の柴澤石右衛門の年寄りが供養の石塔を建て、墓を建てたから浮いて見せよという、水面に波が立ったという。碑面には題目が刻んである。側面には明和八年六月二日とある。(新潟古老雑話)

山木戸に伊三池という池があった。和田が大水で砂押が切れた時に流れて池となった所である。和田の善兵衛さんの身内に伊三と呼ばれた気のいい働き者の男がいた。6月1日、伊三が荷を馬につけ石山のおやさまへ届けに行った時のこと。物日でごちそうになり、いい気分で馬の上で居眠りをしながら帰ってくると、馬が何かに驚いて池の中へ走り込んだ。この池は土堤ばたが崖になっていて四尋(6m)もの深さになっていた。馬は跳ね上がって逃げたが伊三は沈んでしまった。人々は「池の主に見込まれたのでは」と噂しあった。木戸村の柴澤石右衛門が気の毒に思って石屋に頼んで石塔を作り、背負って池に行き、「墓を作って来たから一度浮いて見せらっしゃい」と言うと、池の真ん中あたりの水が波立ち、大きい蛇が鎌首をもたげた。池は後に沼垂の板紙会社(北越製紙)が藁を原料として板紙を製造する用水として池の中からポンプで水をくみ上げていた。水は1km余り離れた会社にヒューム管で送っていた。木戸村16組の共有地であった2,300坪余の伊三池は昭和九年会社に買収され、新潟地震後は個人の手になたて埋め立てられ、邸宅と庭園に変わった。(にいがた夜話)

### ・王瀬長者

大形地区、河渡にほど近い砂丘一帯を王瀬と呼んだ。この王瀬にいつの頃か、王瀬長者という豪族が居住して

いた。王瀬長者の富は王侯をしのぎ、その住宅は城郭にも勝り、妻や女性は幾十人、使用人は数百人、連日酒池肉林という、乱れた生活をしていた。信濃川と阿賀野川の合流地点、濁流渦巻く王瀬の淵には、大助小助と云う夫婦の鮭が何千年もいぜんから棲んでいた。体長は数十丈、砥鎌のような歯を持ち、銀瓦のような鱗は魚の大王という貫禄であった。漁師たちは大助小助を恐れて敬っていた。そのため霜月十五日は漁労の謝恩日として網を入れることを禁じていた。王瀬長者はこれをやめさせて大助小助を捕獲しようとした。十四日の深夜、童男と童女が長者のもとへやってきて「私どもは竜宮の乙姫さまのお使いである。明日家来の大助小助を捕まえるというが、彼らは長年信濃川阿賀野川の両河川を護ってきた功労者だから捕獲することはやめてほしい」と再三申し入れたが、王瀬長者はこの不思議な者の申し出を断った。十五日は晴天であったが大助小助はとれなかった。王瀬長者は家来の手前、虚勢を張って酒を飲み続けた。そこへ一人の老人が現れて、自分はこのあたりの神主であるが、神にささげた魚一籠をお祝いに持参しましたと告げて去っていった。籠の中にはウナギ状の魚が五、六匹が入っていた。長者は喜んでこれを調理させ、酒宴を続けた。この魚を食べた長者及び妻妾たちは夜明けまでに枕を並べて死亡していた。籠の中には劇毒の海蛇が一匹あったのだという。娘一人が生き残り、このありさまを痛く悲しんで、大仏の塔を建てて死者を供養したという。(大形のむかし)

#### ・大亀

松浜新屋敷の角の深い所に甲羅が畳二枚くらいある大亀が棲んでいるといい、亀が河口で浮かび上がると港に入る船の底に当たって揺れた。子どもたちは亀を恐れて松浜新屋敷には、水浴びに行かなかった。(新潟市合併市町村の歴史 研究報告)

#### ・海老ヶ瀬の主

河道が変わる前の阿賀野川のほとりに海老ヶ瀬の開拓者、久代家があった。阿賀野川の主の大亀が漁船を転覆させるので水死者が続出していた。同家では金毘羅様の祠を建てて屋敷神とした。それ以来水死者はなくなり、4月9月の祭りはにぎやかだった。この祠は後に海老ヶ瀬の諏訪神社に合祀された。(新潟市史民俗編Ⅰ)

#### ・海老ヶ瀬新田の昔

海老ヶ瀬には寛政の頃、村の上手に蓮濁、中の濁、亀濁と三つの濁が並んでいた。中ノ濁の主は大亀で、甲羅が畳一枚もあり、頭は一斗樽ほどあったという。時々水面に大きな甲羅を浮かしたと思うと、小さいかなへびに化けて、濁の中を泳ぎまわっていた。この濁にはいろいろな魚がいっぱいすんでいて釣りをする人が多かったが、魚はたくさんいるはずなのに、池の主の化けたかなへびが、チョロチョロ水面に姿を現し走って歩くと、雑魚たちはぱたっと水底に沈んで釣りにならなかった。そ

のため、カナヘビが水面に現れると漁をやめた。(いしがた夜話)

#### ・ツツガ虫

横越島を荒らす強盗がつかまり、縛り上げられて堤外のヨシ野に放り込まれ、虫や蚊に刺されて死亡した。強盗の苦しみの一念が凝ってツツガ虫となった。本所の人は罪を憎んで人を憎まずの念が強かったので、本所の堤外地にはツツガムシの虫毒にかかるものがなかったという。(新潟市史民俗編Ⅰ)

#### ・猿ヶ馬場の即身仏



新潟で新発田重家が白山島に砦を作って上杉景勝の殿さまにたてついていたころの話である。お不動様の笈を背負った修験者、円海上人が通りかかった。にわかには笈が重くなったので木陰で休んでいるとお不動様が夢に出て「この地が宿世の地なり」といわれたので庵を立ててここを入寂の地と定めた。何年かの修行の後、円海上人は猿ヶ馬場の守り仏として即身仏となられた。その靈験は、悪人が猿ヶ馬場に近寄ると金縛りとなるほどであった。明治24(1891)、北陸鉄道の工事が開始され、お堂のある砂山が工事に使用される砂取場となった。即身仏はもっこで運び移転させられた。その時には即身仏は子供ほどの大きさだったという。移転して新しく祀られた円海上人には参詣者が殺到し、よはず張りの茶店が何件か並び繁盛したが、無許可だったので役所から注意され、元の場所の瓶の中に埋め戻された。その後起こった大正4(1915)の大水、大正6(1917)の曾川切れなどで水につかり、即身仏は骨だけになってしまった。大正13(1924)、現在の場所に移した。戦後お不動様を祀



た円海院は無住だったところへ疎開者が住み込み、昭和22(1947)年11月20日、炬燵の不始末から火事となった。その火事の時に不動態が自ら消火の手伝いをされて半焼で済んだという。円海上人の墓は観音脇に再建されて、猿ヶ馬場の遺跡となっている。(にいがた夜話)

### (3) 中央区

#### ①王瀬長者の話

##### ・法光院、王瀬長者古碑の由来



信濃川と阿賀野川の合流地点、渦巻く淵に大助小助という夫婦の鮭が棲んでいた。霜月十五日は漁労の謝恩日として網を入れることを禁じていた。長年居住している王瀬長者という豪族がその謝恩日を無視し、漁師に漁を命じた。その祟りによって一族は横死した。法光院に長者の古碑がある。(越佐要覧)

##### ・王瀬長者

沼垂はもともと山ノ下の位置にあり、王瀬長者の屋敷の木戸跡が上木戸、中木戸、下木戸、山木戸で、長者が牡丹を植えたところが牡丹山、藤を植えて見たところが藤見町だという。大助小助は毎年霜月15日に川を上った。それを獲ろうとした長者は没落した。法光院は長者の菩提寺であった。寺には五輪の供養塔と長者の娘が織ったという三千仏の画像がある。

長者は山ノ下にあるムカイ山に住み、ムカイ山の長者といったともいう。ムカイ山は沼垂の山で、沼垂山ともいった。(新潟市合併市町村の歴史 研究報告)

##### ・王瀬長者

十一代垂仁天皇の第五皇子、沼垂別帯の命は帝の命を

受けて、王瀬の地に留まり漁労の術を教えた。その何十代目かが「ふじの山長者」といって立派な邸、幾住棟の土蔵、何百人の雇人をかかえて山木戸・中木戸・上木戸の中に藤の山、牡丹山、物見山など広大な敷地と信濃川と阿賀野川の合流河口に鮭網の漁獲権を持った。ある時、長者は子どもに熊の毛皮を着せ、物見山に萩見見物に行った。大鷲が息子を熊の子と間違っただけで、飛び去った。大榎に大鷲が羽を休めたすきを見て息子は逃げ出して大きな門構えの邸に入り、案内を乞うと片目の下男が出てきて押し黙ったまま座敷に招き入れた。しばらくして白髪の片目の翁と媼が出てきて大勢の家族から歓待を受けた。帰る時に翁は、自分は鮭の王で大助小助である。霜月十五日川を登ることにしている。貴殿の親は網を持つ長者だということで一日だけ漁を休んでほしい。できなければ網の目を三つだけ外しておいてもらいたいと告げた。息子は帰って親に話を告げた。さらわれた息子の帰宅に喜び快諾するが、「鮭の王の肉は不老不死の妙薬」と知恵をつける者がいて長者は二百尋の丈夫な網を用意した。前夜、長者の枕元に片目の翁と媼が現れて網の取りやめを願ったが断わった。当日、黒雲が湧き、雷鳴の音ものすごく、皆が恐れていると闇の中から「長者ご苦労」の声が聞こえ、片目翁が空に舞うのが見えた。怒涛は高波となって網を破って船を流し、長者屋敷と秋の収穫を濁流の中のみ込んだ。一人残された長者は業病となって河渡の地に薬池(ドスガクボ)を作り療養したが甲斐なくこの世を去った。今は僅かに王瀬、ふじ山、ドスガクボ、牡丹山などの地名が残っている。沼垂の法光院の墓は長者の墓という。大助小助の片目は網を避けて柚子の棘で突いたとされ、川漁者は柚子を食べなかった。(にいがた夜話)

#### ②新潟湊にまつわる話

「越後村名尽くし」や「義綱勲功記」等の古い書によると後冷泉天皇の康平年間に港らしいものになり、小さい舟が相当出入したように書かれている。康平と云へば源頼義が奥羽の安倍貞任と九年の星霜を賭して戦っていたころである。元龜天正の時代になると、北國筋の唯一の港と認められたらしく、「越後治乱記」には、新潟は會津川信濃川と落合ひて海に続く處の要害堅固の地であると書かれている。夫から約百年経った寛文頃には江戸の河村瑞賢が東北沿海の航路を開いたときに、新潟を寄港地の一つと定めた「北越略風土記」は稍手前味噌はあるかも知れないが「新潟は当国第一の大港にて商家数千軒、諸国の買船入り集い西海、南海は勿論或は北洋を廻り南部松前の遠地へも往来し融通自在の繁華最も稱すべき廣津なり」と男を上げさせ、また「北越軍記」等も「居家三千余軒古町、新町、他門通り、片原、寺町等称して甚だ繁華の地なり諸川の落合にて俗に八千八川の流れ此處に集ると云ふ」とある。八百八橋だの、舟江の里だのと名はもう此次代から生まれたい。「吉田松陰紀行」に

は人烟萬竈、縦横渠あり五方群集して百貨具備す隠然北州の一都会とす予新潟より松前に直航せんことを謀る三日夜達すべし陸行十数日を累ぬる…」とあり、橘南溪の「東遊記」などは「新潟は信濃川其外の川の落合ひて海に入る所より海口近く一二里の處は川幅広きこと一里二里ばかり渺渺として湖の如く入海の如し岸より岸まで水甚だ深く千石に千石の大船といへども何処までも自由に入入りす誠に川港にては日本第一と云うべし川幅の広さも天下無双と云うべし」と、新潟は日本第一の港だと褒めている。「新潟砂山米ならよかる沖の船頭に皆積みしよ」の唄は当時の殷賑を物語るものであろう」（海の越後佐渡）

#### ・新潟港の変遷

阿賀野川が松ヶ崎へ落ちるようになったのは、享保十五年である。それが其年の洪水に松ヶ崎の掘割が破川、濁流は滔々として流れ落ちた。新潟の港も、川の落口の変遷につれ、始終移動していたものである。元禄頃には今の五祭堀の本町通を川縁として北に下り、少しばかりすると港口であった。それが阿賀野川が東に進み、約二百年間に千二三百間は陸になった。今日の入船町横七番町から寄付町、早川町、港町、また住吉町や毘沙門町一帯は阿賀川分水後、相接して島となり今日に至ったもので、礎町からあの辺り一帯を俗に島と言った。今のダッポン小路もその昔船頭が碇を卸した地である。新潟港は砂で埋まっていく一方だが、その昔天正頃は大船相續いて入港したという記録もあり、正保二年公儀より渡された製図には深さ一丈四五尺とあり、延宝八年訴訟立会図には水戸口の深さ八尺より十尺、十二尺乃至十五尺と標され、元禄十二年の「訴訟立会図」には水深中央二十三尺、左右十五尺乃至二十二尺川幅百七十八間とある。その新潟港が阿賀野川の分水ですっかり港が埋まり、分水して五六年目の元文二年には四尺七八寸乃至六尺、寛保元年には四尺乃至五尺四五寸というはかない水深をようやく保つ状態に陥ってしまった。（海の越後佐渡）

#### ・信濃川と阿賀野川の河口について

新発田藩と新潟側で延宝8（1680）元禄10（1696）元禄12（1699）享保11（1726）の4回にわたり争っていた。その訴訟はすべて新潟側が勝訴していた。新発田藩は享保15（1730）松ヶ崎掘割の許可を幕府からうけて、掘割を行ったところ、翌年8月の出水で一夜にして川幅130間のものとなり、流水通路を一変してしまった。二つの川は寛永の頃は河口は別であったが寛永10（1633）に加茂屋堀という細い堀を通して信濃・阿賀の両河が通じていたのが、9月の洪水で加茂屋堀が決壊し河口が一つになっていた。（にいがた湊祭）

#### ・新潟港と湊元神社の始まり

播磨の郷士、河村伝右衛門は豊臣家縁故の者であったので徳川幕府になってから浪人となった。広島を去ることになって名を広嶋と改め、旅をしながら新潟にたどり着いた。渺茫たる砂丘に仮寝をしていると一人の白髪の

翁が右手に団扇、左手に巻物を持った姿で現れ、「吾は海神なり。この地新潟は、将来市湊として繁栄の地なり。汝、湊都発展のために、その力を奏せよ」というと姿を消した。仮寝の夢から覚めた伝右衛門は、この霊夢に感ずるところがあって、海神という住吉の神を崇敬してこの地新潟に住み着いた。

伝右衛門の後裔の回船問屋、網干屋広嶋治兵衛が伝右衛門の霊夢に感ずるところがあり、弟の広嶋伝兵衛を平安の都へ登らせて、住吉の神の神霊を御受けした。通称“三本松”と呼ぶ地に社殿を創建し、ここに住吉の神の神霊を祭祀した。この社を湊元神社と号した。創建年月日は伝右衛門が霊夢を見た頃からおよそ五、六十年程度の延宝8年（1680）6月20日。三本松の辺は、新日和山の西北の何町か先で、当時は砂山丘にあった。回船問屋網干屋の庭園のあったところでもあり、日本海を往航する廻船の新潟湊ここにありという目印になっていたともいう。享和元年七月の作成になる“新潟湊商工業地域図”に記載されている。（にいがた湊祭）

#### ・新潟祭りの始まりと合祀された湊元神社



網干屋広嶋治兵衛の家は長音寺（夕栄町）の大門の角辺で、強勢のものであった。祭典は毎年7月1日～7日まで行われた。廻船問屋の屋敷神であったものを、そのご加護により入船繁く、家業も隆盛したので住吉の神への感謝と今後の発展への祈願から、新たに神輿に準じるものを出して洲崎区域に巡行する華やかな祭典とすべく藩主牧野家の手を介して幕府に願いを出した。それが認められ、享保11（1726）初めて神輿巡幸の祭典が“湊祭”と称されて行われた。

川筋が大きく分かれて湊が浅くなっていき、新潟側ではこの時こそと住吉の神に祈願し、湊の発展を元に戻すべく祭典の拡張を官に誓願した。認められたのが寛保2（1742）9月。回を重ねるたびに盛大となり、新潟全町内を巡行するまでに至った。当初の神輿は蘆の船の中へ幣束をゆわえた帆柱を立て、蒲穂にて船型の物を造りこれを蘆の船に乗せ「諸国通船海上安穩」と書いた幟を蘆の船の中に立て、波を描いた幕を蘆の船の周囲に張り巡

らせたものであった。巡行の日は祭典最後の七日で、この船は巡行が終わると海に流していた。

このように新潟の港の隆盛に関わった湊元神社であったが、あとを継ぐ者が亡くなり、白山神社に合祀された。(にいがた湊祭)

### ③その他

#### ・蛇を祀るお社 栄大権現

栄町に塚田氏が竹細工の工房を建てると、毎夜夢の中に蛇が現れ、「昔ここは沼だったが、砂崩れで埋まってしまった。その沼の主であった自分も埋められ、非業な最期をとげた。何とか供養してほしい」と訴えた。夢と思っほっておいたら親戚の者が病気やケガをした。「これでもわからぬか」と再び夢を見たので大正15(1926)、塚田氏の誕生日の2月1日、屋敷内に社を立て沼の主の蛇を祀った。その後家運もよくなり、第二次世界大戦中に、この社でお祓い祈願をして出征したものが全員無事帰国したので評判になり、町内でお祭りを始めた。(にいがたふる里さんぽ)

#### ・玄的

安倍玄的という医師が最初に住んだので玄的という。念吉という酒癖の悪い男を懲らしめるために藪に縛っておいたが、反省しないので手足を縛り俵に詰めて信濃川へ投げ込んだ。念吉は大亀となって祟ってやるといいながら流された。念吉の恨みのために川欠けがあるといった。(新潟古老雑話)

#### ・白山神社

信濃川のほとりを通りかかった按摩が、新潟を湖にする相談をしている大蛇のたくらみを聞いてしまう。人に言うと命はないと脅されたが、按摩は新潟の人たちに話して大蛇に殺される。しかし大蛇も追われ、新潟は無事で、この按摩を祀ったのが白山神社だという。(続・越佐の伝説)

## (4) 江南区

### ・伝生院塚



亀田から大湊に入る手前に細い用水路に架かる橋がある。ここから数十メートルの田の中に伝生院塚がある。ここには古峰神社・湯殿山・庚申塔、供養塔ともう一基文字の読み取れないものが五基ある。天明の飢饉の時、

新発田城主に救いを求めるために松ヶ崎方面や新発田藩領の西蒲原方面から百姓たちが大挙してここまで来た。しかし橋を渡り切れずに大勢の者が飢えと疲労で力尽きて死んでしまった。伝承院という修験者がこの大勢の死者を埋めて供養した。昔は大きな川で、橋は高い土手に架かっており、ここを登れず倒れたのだった。修験者伝生院は姓を菅原といい、三人の兄弟が京都から新潟市郊外の河渡に居住していた。のちに長兄が大湊にきて伝生院、次兄は岡山の起倫寺を開基、弟は寺山で修験者になり姓を寺山に改めた。(新潟市合併市町村の歴史 研究報告)

#### ・樽川

沢海と木津の境の農地に樽川という地名がある。江戸時代元文年間(1736～1741)の小阿賀野川の堰と掘割普請が行われる前まで小阿賀野川の本流として沢海と木津の間を大きく内側へ湾曲して流れていた。横越と満願寺に地頭がいて、二人があるとき領地のしるしを立てるのに、酒屋まで小阿賀を掘った。その際、水神を祀るために百個の酒樽を数千の人足にも振る舞い、その空き樽を川に浮かべて誓ったところから、この場所を樽川と言いつた。境のしるしには柳を植えたという。(横越のむかし語り)

#### ・白髪水

天正年中(1573～1592)、会津猪苗代から流れている阿賀野川が大洪水となり、薬師の尊像が流れて茅野に引っかかっているのを木津の者が見つけて小さな茅堂を建て安置し祀った。このとき大水によって流された家の上に白髪の老人が乗ってきたため白髪水と言われた(横越のむかし語り)

#### ・焼橋の地蔵

割野の中を流れる早通川は小阿賀野川の支流で、村下の虫見堂から来る堀と沼堀が合流する。沼堀が早通川に流れ込む地点に焼橋と称する橋があった。昔は木の橋だったが何度も焼けたので地蔵を建てたところ焼けなくなった。(新潟市合併市町村の歴史 研究報告)

#### ・早通

湿地帯を割野の人が荒野を拓いて用水路を掘り、それに沿って開墾を進め部落を開発した。この水路が割野方面の南から早通部落中央を北に縦走する近年まで続いた居前堀(早通堀)である。割野の人々が新潟や沼垂方面に抜けるのに大変近道だったので地名も早通と改称された。(ふるさとの地名亀田)

#### ・栗の木川

栗の木川は沼垂川・亀田川ともいわれる。山二ツ東部の水中に栗の大樹の成木したようなものがあったので栗の木川という。「割り抜き川」という説もある。(ふるさとの地名亀田)

## ・七面様



阿賀野川はツツガムシの生息地として有名なところで毎年のようにツツガムシ病で人が亡くなった。横越町のツツガムシ除けの神様として横越下の天王様、焼山の蝸牛様の隣に祀られている天王様、小杉上の牛頭天王と沢海下にある七面様、上木津の天王様がある。かつて庄司家にあったが、沢海中村正孝家が預かったものと言われている。中村家には「毒虫鎮守七面大明神略縁起」の版木も所蔵されている。天保6（1835）にツツガムシがことさらに増え、川根谷内の久延山妙泰寺妙雲院日周聖人を招き、ツツガムシが多く発生している辰の口、焼山、弁天島、樽川に塔婆を立て、妙法蓮華経による救護の大誓願を行った。すると翌年罹病するものがいかなかった。天保9年に毒虫鎮守七面大明神を安置、毎年五月の節供に祭礼を行うことになった。七面様が大蛇になってツツガムシを退散させてくれるのだと伝えられている。（横越のむかし語り）

## ・宗賢寺裏のヤモリ

横越下の龍淵山宗賢寺の卵塔場（墓場）の後方に小さな瀉があった。そこにはヤモリが棲んでいた。端午の節供には邪気払いのために屋根のひさしに菖蒲を刺したり、菖蒲湯に入ったりした。ところがその菖蒲を宗賢寺裏の瀉に捨てると蛇になるといわれ、恐れられた。（横越のむかし語り）

## ・頭無堀

土地改良前、横越と小杉の堀の水は下流の藤山へ流れ込んでいた。藤山は新潟砂丘列の中で一番古く、集落のある所は高台となっているので上流から放射線状に集まってくる堀の水はそこで遮断され、そこでよどんで沼のようになってしまうため「頭無」と呼んでいた。藤山堀の最上流を「トメ」と言い、その先の横越寄りを「頭無堀」と言っていた。そこに頭のない大蛇がいて、人が近寄ると引っ張り込まれるといわれていた。（横越のむかし語り）

## ・長池の雨乞い

昔、木津には樽川池、谷地池、長池、三四郎池、小左衛門池、水戸池、神明様池とたくさんの池があった。これは水害の切れ込みのあったところで、それが池となっ

た。長池は木津から沢海に至る間の堤外地に幅 30m 長さ 600m という池だった。夏の炎天が続くと木津も沢海も藁で大きな竜を昇天の姿になぞらえて作り酒肴を供えて雨乞いをした。（横越のむかし語り）

## ・丸渦化物

戦前の亀田郷は有名な湛水地で、秋の収納後から春の田打ち前までは一面が浅い湖のようだった。風のある時は相当の波が立った。晩秋、星のない暗い晩には丸渦から鳥屋野瀉にかけて稲架木の梢上、二尺位を灯りがフワフワと移りとぶのが見られた。人々は丸渦化けもんと言っていた。一説には老いた白鷺の作業ともいったが、大正時代まで見られた。（鳥屋野地区の今昔）



## (5) 秋葉区

### ・蛇崩山

余吾將軍の室、菊の方が数人の伴を連れて天ヶ沢へやってきた。すでに將軍は亡くなっていて、菊の方は尼となって將軍の冥福を祈っていた。それで尼ヶ沢というようになった。夫のいる方を伏し拝み香華を捧げたところを花立山、念仏を唱えながら歩いたところを仏路といった。朝晩念仏をとこなえているので名号谷と呼ぶようになった。その天ヶ沢の東南一帯に大蛇がたくさんいた。武勇のお方さまであった菊の方はこの大蛇も退治して里人を安心させた。そこを蛇崩山という。その後、ここに蝦蟇が里人を恐怖させたが蝦蟇も退治した。そこを蝦蟇が沢といい、あとで鎌倉と改称した。菊の方が射た矢の代わりに村人は新田を開拓して田を献じた。それで矢代田という。天ヶ沢正ヶ射矢大権現は菊の方を祀ったと言われている。（越佐の伝説）（こすど風土記）

### ・川口の生き地蔵

慶安元（1648）年、川口地内の能代川堤防上に村人有志が地蔵を建立した。寛政元（1789）8月、豪雨で能代川が増水して堤防が切れそうになった。真夜中に「土手が切れるぞ」と大声で村中に告げる者がいた。村人は

驚いて土手に集まり補強して難を逃れた。夜が明けると土手の地蔵が全身泥だらけになって立っていた。告げて歩いたのは地蔵だったと感謝し生き地蔵としてあがめた。明治9年、河川法の改正によって地蔵は改観寺の境内に移された。(新津市史)

#### ・雨乞地蔵

飯柳に雨乞地蔵という靈験あらたかな地蔵がある。日照りが続くとき三尺ほどの龍を作り、それに地蔵様を乗せ、鐘をたたきながら行列をしていた。(続・越佐の伝説)

### (6) 西区

#### ①高橋源助のこと(西蒲区と西区にまたがる伝承)

##### ・曾根樋管割前筒のこと

高橋源助の父は武田信玄の武将の一人で武田宇右衛門という。主君の敗退の時に戦死したので母は息子を背負って越後に逃れ、見帯に身を寄せ本名を隠して高橋を名乗り、手習い師匠をしながら百姓をして生計を立てていた。息子を源助といい、知識豊かで信頼されていたので村の総代となり庄屋から割元庄屋となった。源助は寛文六年に没し、妻は六年後に亡くなった。父は子に「我が家は当地曾根に来てお世話になった。当地の割元として、よく村のために身を粉にして働くようにせよ」と遺言した。息子は襲名し、二代目源助となった。曾根の田地は高いところが多く、天然の雨水を頼りに耕作するより仕方なく「ヒバリコロバシ」といってひばりの隠れ場もないほど小さい稲しか育たなかった。さらに水害のための立毛(田畑の作物)と違って免引きは充分でなく明暦年間に「水かかりなき田は開墾聞き届け難し」というお布令が出たほどであった。お上に上納米の完納し、村人の生活の安定させるためには、何としても用水の確保を図ら



ねばならなかった。西川筋の割前地先(巻町割前)に用水取水口を設け、一里半の用水路を掘削して通水したら、曾根の田地二百町歩と筒沿いの村々の耕地も灌漑できると確信した源助は、関係の村の同意を得たが、源助の要望をねたんだ取水口の割前村、藩役人の中根某が、割前庄屋権左衛門と相談して源助の失脚を狙った。源助の願出が不許可になるよう藩の上司に工作し、源助は藩に呼び出されて土牢に押し込められて、樋管伏設願を取り下げるよう強要された。中根某は自ら残酷な取り調べをして願い下げを強要したが応じなかった。願い下げがない以上、地元の同意書もあり、開墾奨励の意味からしても許可しないわけにはいかなかった。役人は樋管を伏設しても通水の見込みがないから願書の取り下げを迫ったが源助は「測量には絶対の自信があるし、必ず通水する」と頑張り、自分の首をかけて責任をとると首掛けの請願で許可を得ることになった。そこで曾根村百姓九十戸、自分たちの割元を死なすべからずと必死に工事をしたが、反対者の手によって細工がされ、通水しなかった。そのため、「約束通り打ち首に処す」と、樋管竣工通水式場にはわかたに断頭台場と化し、源助の首は中根の刃により水中に没した。その瞬間、ものすごい水勢と共に、板を口にくわえた源助の首が樋管から押し流されて水面上に浮かびあがった。首は板をくわえたまま、流水の先端に立って一里半の曾根の筒尻まで流れ着いたと伝えられる。源助の帰宅を待っていた妻のモヨ女は、村人から知らせを受け、一刻も早く他領へ逃げるように勧められた。モヨ女は道を避け、一子長四郎を背負って田んぼの葦谷地の薔薇の中を歩いて三里離れた小中川村に逃げた。そこは初代源助が曾根に来る前に数年住んでいたところで、長岡藩の追手も村上藩領なので手が出せなかった。源助の家は取り潰されたが、村人が家財道具をこっそりと妻子のもとへ送り届けた。源助の首は筒尻の漂着地に埋葬された。源助は罪人という汚名を蒙ったため、表立って弔うことができず、一本の榎を植えて墓標とされた。二百年後、周り約十尺位の大木となったが、明治元年の地検の時の用材とされた。明治27年、百日の大干ばつがあった。西川は西汰上堰下の流水がなくなり田植えのできない村々が多くあったが、曾根村は割前筒のおかげで田植えができた。この時村人は改めて源助の偉業に感謝して、法要を営んでその霊に感謝した。それ以来続いて法要を施行している。曾根で割前筒浚いをするとき、必ず雨が降ると近郷の村人は伝えている。昭和二年、首塚に石の堂宇を建て、源助の霊を弔った。(ふるさとにかわ町)

##### ・曾根樋管割前筒

源助の子孫は武田源助として黒埼町木場に現存している。小中川に身を潜めた二代目源助の妻と子は、元の武田姓を名のり、三十年後木場に移り住んだ。一説では武田宇右衛門が越後に遁れ来て曾根の見帯に住み着いて高

橋姓を名のり百姓となったと伝えている。二代目源助の妻は甲斐の国から最初上野の国（群馬県）へ逃れ、三国峠を越えて柏崎に入り、弥彦に移り、小中川に移り数年間住んで曾祢に移ったという。住んでいた家が残っていたので妻子は小中川に身を潜めたのだろう。この家は武田家が木場へ移住した時に移築、緒立に文化財として保存され300年以上たつ。昭和13年9月22日の新潟新聞紙上に「源助の胴はこの（金剛寺）境内に埋葬されたのである。金剛寺は寛永年代村の総代時代の源助（初代）の発願により建立したものである。父母妻の位牌はあるが源助は斬首されたので位牌はない。首は見帯の塚、寺には胴体の墓がある。（ふるさとにしかわ町）」

#### ・六兵衛の棘なしバラ



源助の妻モヨが一子長四郎を背負って小中川へ逃げるとき、田んぼの葦谷内のバラの棘のために傷を負い、衣装もずたずたに避け、血で染まった。「もし、このバラにトゲがなかったら、こんな苦しみにあわずにすむものを」と嘆き、このバラの一枝を折って小中川の庭に刺すとそのバラからはトゲが落ちて誰いうともなく「トゲなしバラ」と呼ばれるようになったという。（ふるさとにしかわ町）」

武田六郎兵衛家の周囲にあるバラは棘がない。武田家の祖先は信玄十八将の一人。曾根の見帯に高橋姓を名乗って住み着いた。樋管工事の咎で首をはねられ、妻子が逃走してきたことに由来している。（黒埼物語）」

#### ・富出村神明宮

慶長13（1608）頃大阪城の残党が落ち延びて来て、今の曾根二番町に村名をつけないまま四十三年も住み着いていた。時の庄屋高橋源助の英断で承応元年（1652）開墾届を出し、許可を得て富出村となった。承応3（1654）村民協議の上初めて祠を建てたと伝えられている。（ふるさとにしかわ町第二集）」

#### ・鎧漕弁財天

鎧漕排水機場公園敷地内にあり。明暦2（1655）5月高橋源助発願に依り、村民が同意して水除記念のため沼田の中央に境内を設け石祠を立てて祀った。俗称して弁財天という。曾根開拓誌によると、早通川の頭の島に



曾根は弁財天を祀って早通川及び鎧漕を鎮守するとある。（ふるさとにしかわ町第二集）」

平成27年、鎧漕弁財天の石祠は鎧漕排水機場の新規建設工事にあたり、遠藤神社に移転した。

#### ②その他

##### ・矢ノ根稲荷

的場に稲荷の祠がある。かつてここに漕があった。ゴミざらえをしたときに矢ノ根が出たといい、地名になった。

里人は黒鳥討伐の戦いがあったところだという。漕は干拓されて畑地になり、松の木が一本生えていた。（新潟市合併市町村の歴史 研究報告）」

##### ・平島波切名号（川越名号）

親鸞上人が鳥屋野から平島へ渡る時に川が荒れ、船頭・新十郎が船から落ちそうになり、親鸞聖人が一枚の紙に南無阿弥陀仏と書くと風も波も鎮まった。上人は新十郎にその名号をあたえた（越佐要覧）」

##### ・赤池の大蛇

西川の大曲に大蛇がすむという池があった。この池の大蛇が大暴れすると土手が切れ、取入れを迎えるまでになった稲が泥水につかり、春からの苦労が一晩でだめになった。そこで、七夕の日に川沿いの村々の庄屋様が集まり、蒲原様の巫女にみてもらった。すると「子どもをいけにえにさし出すと大蛇はおとなしくなる」というお告げがあった。村々の庄屋様がくじを引くと当たったのが亀貝の庄屋様だった。亀貝の人たちは困って相談したがいい考えは出ず、一人の村人の案で夜空に向かって矢を放ち、矢が刺さった家の娘をさし出すことになった。翌朝暗いうちから起きて自分の家に矢が刺さっていないか探した。むらの真ん中あたりの弥兵どんの家で赤いひものついた矢がささっていた。弥兵の家ではカカが五人の子どもを抱いて半狂乱になって泣いていた。そこへ婆が来て「子どもなんかださんでもいい」と言い、庄屋に頼んで村中のぬい針を集め、それにどぶろく四斗と大釜に二つのけえもち（おはぎ）を作ってもらい、けえもち一つ一つにぬい針を差し込み、外から見てもわからないようにした。それから婆は赤い子どもの着物を着て暗くなるのを待ち、大池につけて行ってもらった。しばらくすると池の中の水がざわざわと音をたて、その音がだんだん大きくなって大蛇の頭が月明かりにぬっと出てきた。大蛇は池の周りをぐるっと見渡し、子どもの姿を見つけると頭を振り、子どものほうに進んだ。子どもに成

りすました婆は大蛇が寄ってきたので「けえもち食べれ」と手で合図した。大蛇は大櫃のけえもちを一口でパクン、もうひとつもパクン、と二口で飲んだ。また子どものほうへ顔をむけたんで、今度は酒樽へ手招きをすると、この酒も一口で飲んでしまった。さすがの大蛇もけえもちと酒で腹いっぱいになったんで一休みした。しばらくたって大蛇は子どもをパクリと襲い掛かったら、さっき食べたけえもちとどぶろくが一緒になったので針が腹に刺さり始めた。大蛇は大声を出して飛び跳ね、そのままだぼーんと池の底に沈んでしまった。それから大蛇の姿を見た人はいなかった。婆も無事であった。翌朝には池が真っ赤に染まっていた。それからこの池を赤池と言うようになった。(ふるさと坂井輪2集)

#### ・大曲の地藏堂

明治29年の大洪水で坂井の大曲の堤防が決壊し、小針に近い方から大池、小池、中池という三つの大きな池ができた。池の中央のほぼ元の位置に堤防が作られたが、池は終戦後まで残っていた。大池の傍らに14本の松に囲まれた古い墓地があり、大小11基の石地藏が立っていた。江戸時代の禅寺の跡だという。明治の末頃から人骨が出土していた。ある時一番大きな一体だけ残し、残りの地藏の頭をもぎ取って近くの田や大池に投げ込んだものがいた。地藏は近くの古老の夢枕に立ち、「寒くて仕方ないから早く助けてくれ」と救いを求めた。そこで頭を拾い上げて地藏に据えて安置した。昭和43年地藏堂が建てられ、8体の地藏が安置された。明治29年の大洪水の時に地藏様が流れてきたという話もある。(新潟市史民俗編2)

#### ・坂井輪村大曲の地藏さま

大曲は西川の流れてくねくねと土手が曲がり、小針に近い方から大池、小池、中池という明治29年の破堤の名残が残っていた。池には鯉、鮒、鯰などがたくさんいた。十四本の松の木に囲まれて十一体の地藏さまが祀られ、古いお墓も三、四基あった。昔、禅寺があったという。旅の勤進がどこの家でもドーレと断られたので腹を立てて大きい地藏をのけてあとの地藏の首をもぎ、あっちこっちへ投げた。秋になり、林次さんの寝ているところへ破れ衣を着た地藏そんが「寒ーべ寒ーべてしょうがね。助けてくんろ」と夢知らせがあり、大池に行ってみたら頭のもげた地藏さんが並んでいた。池や田の中から頭を探して首を置いた。それから魚がたくさんとれるようになった。4/28,8/28に祭をするようになった。その後、池に大蛇が住みつき池の主となったので釣りをする前には必ずお神酒を供えた。主は五尺樽ほどの大蛇だという。(にいがた夜話)

#### ・升岡村のすずたさま

祭神・静田蛇除御守、大正14年6月が創立年月日か。今の新川が改修される前は早通川といって、川には九十九曲がりもあった。その曲がりごとに水の流れが激しく

なり、そこには大蛇が住むと言われた。升岡の地先の付近で何人かの子どもが溺死してしまった。そこで村中の人たちは幼くして不運にもなくなれた子どもたちの供養をするともに、今後絶対にこのような悲しい水難事故が起きないようにと、升岡村中の人たちの切なる願いをこめて「静田蛇除御守」が祀られたと言いつた。(ふるさとにしかわ町)

静田神社。すぶ出しの淵でたくさんの子が亡くなり、升岡村中の切なる願いをこめてすぶ出しの淵のほとりに祠を建立しすずたさまを祀った。昭和29年の耕地整理で五十間ほど下手へ移動した(内野西2丁目15)。以前は春と秋の祭りの日に鎮守さまのおまいりに先駆けて神官を先頭に村中でお参りした。プールができて子供たちが川で遊ばなくなった二十年ほど前から春祭りだけとなった。(ふるさとにしかわ2)



#### ・カワウソ

藤野木の下外れの川辺の道にカワウソがいていたずらをした。浜からミノ笠姿でイワシを売りに来た女性のミノに火をつけ、女性があわてて消しているうちに魚を奪った。(新潟市合併市町村の歴史 研究報告)

#### ・小新の狐

「あしたは雨が降りそうだ」という夕方に、西川の堤防のあたりに提灯が並んで見えた。「キツネの嫁取り」といった。(新潟市史民俗編1)

#### ・一本足の高男

小新の親類の所へ田植えの手伝いをするために川を渡ろうとしたら、前に一本足の背の高い男が立っていた。カワウソが赤飯を狙っている化け物だと思い、回り道をしたが、その男は前に立っていた。真っ青な顔でやっと親類の家へたどりついた。(新潟市史民俗編1)

#### ・西川の大泥鰌

天明の頃、坂井輪村に小林与惣兵衛という代々生き物を殺したことがない男がいた。西川と沼に囲まれた村に育ったので、魚だけは「川に流れた葉っぱだ」と目をつぶって食べていた。ある時大きなドジョウが釣れた。大きな蛇ほどもあったので川の主かもしれないから川に戻そうと思ったら死んでいた。これは大変だとたまたま通りかかった村のお寺さまに手伝ってもらいドジョウを埋めてその上に石を置いてお経をあげてもらった。夜、目

の覚めるようなきれいな娘が枕元にたち、お経のおかげで成仏できたと礼を言った。惣兵衛は長生きし、人に惜しまれて大往生した。(にいがた夜話)

## (7) 南区

### ・網にかかった阿弥陀様

300年ほど前、沖新保のあたりは広い潟がたくさんあった。フナやコイがとれた。或る日、漁師が漁をしたが何もとれなかった。潟の底に光るものがかかったのどとってみると阿弥陀様だった。家に持ち帰ると「盗まれて潟に捨てられた。寺に帰りたい」という夢を見たので玄龍寺へ持っていくと住職はすでに来ることを知っており、漁で魚をたくさんとったことへの感謝と懺悔をするように言われ、漁師は僧侶になって阿弥陀様に仕えた。(あったてんがのいばらそね)

### ・角兵衛獅子の由来

中之口川氾濫による月潟村の疲弊のための生活苦から角兵衛獅子うまれたという説もある。(月潟村誌)

### ・凧合戦の由来

凧合戦は白根と対岸の味方が中之口川をはさんで毎年六月菖蒲の節供を祝って行われる名物行事。今から300年前、毎年中之口川が氾濫し新発田藩の白根町と村上藩の味方村白根の人々は治水工事に大変苦労していた。元文二年五月、白根町の庄屋神山忠兵衛は堤防改修工事が完成した祝いに殿様に招かれた。ちょうど城では男の子が生まれその祝いに三十枚の大凧が飾られていた。忠兵衛は殿様から凧をもらい新しい堤防の上で上げると凧が落ち、川向の神山又衛門の屋根を壊し、さらに田畑を荒らしてしまった。又衛門は怒り、さらに大きな凧を作ってあげ、忠兵衛の屋根にたたきつけて壊した。これがもとで始まったというが、新発田藩と村上藩が後ろ盾になってお互いの強さを競った。(越佐の伝説)



### ・三枚潟

月形に残る小字名、潟端の潟は三枚潟のことである。月潟から木滑のほうにあった潟で、その端にあったのが潟端であった。(月潟村誌)

### ・白い蛇

西萱場の文太郎ろんに白龍といわれていた白い蛇が住んでいた。西萱場の水戸(水戸=川切れがあった場所)といわれていたところがあり、白龍がすんでいたが、池がうめられて畑になった。白龍は住み家を追われ、文太郎のところに移り住むようになった。文太郎は骨つぎの商売をしており、どんな骨の病気でもなおしてくれるので商売はたいそう流行っていた。文太郎は「これはきつと、あの白い蛇のおかげにちがいない」とお堂を建ててお祭りをした。お堂の裏に蛇が水を飲むための小さな池を作ってやった。お堂のお祭りの日には、蛇の好物の卵をもって大勢の信者が列になってきた。文太郎の家が三条へ移るまでお祭りが続いていた。(月潟の昔話)

## (8) 西蒲区

### ・押付の地蔵尊

八体の地蔵あり。五月に一回村の班ごとに婦人が交代で地蔵さまの衣替えの準備をするようになった。頭巾、おけさ、前掛けなど衣更えをしている。①番待ち地蔵…1.5尺ほどの石に地蔵様が浮き彫りにされている石塔。昔青年達が力比への道具に使っていた。もったいないので村中の一隅に屋敷を与え祠を作って祀ったもの。後に耕地整理などで集めたほかの地蔵とともに一か所に祀り、この地蔵を中心とした。②三吉地蔵…番待ち地蔵の右隣。潟東の三吉という男が巻でばくちをうって勝ち、家へ帰る途中、後を追ってきたバクチ仲間へ殺され、金を奪われたうえ、身柄は用水池へ放り込まれてしまった。その頃村の水回りをしていた「たえみ」(幸田太右衛門)の爺さんが夜中、大雨の水廻りに出かけ、池の側を通ると三吉の幽霊が出た。再三出たので村の有志が相談して地蔵を作り、庵主様に供養してもらうようになった。経をあげるには遠いので、庵主様が自分の庵に地蔵を移すと、たえみの爺さんの夢枕に三吉が立って「元へ戻りたい」と三晩も出たので地蔵屋敷の建物へ移した。③耕地





整理や道路工事のためなど火葬場の廃止で移されてきた地蔵さま二体。後は矢島の五十嵐周平さんの家の地蔵さま、交通事故で死亡した人の供養のために国道端に建てられた地蔵さま、いつの間にか置いていかれた地蔵様である。(ふるさとにしかわ町第二集)

#### ・お仙地蔵

元禄の中期、梅雨が長引き雨が降り続いて西川が破れそうになった。人々は俵に石や土を詰めて積み上げ、杭を打っていたが、善光寺へ水を引く用水路の樋管が抜けてしまった。堤防が20mも流され、田も畑も泥の海となった。近くの村の者も応援に来たが樋管のところだけは何度修理しても押し流された。疲れ果てた人々が村の鎮守さまに集まって神のお告げを聞くと「若くて美しい娘を人身御供にして川へしずめれば水の勢いを弱めてやる」ということだった。そこへ若く美しいお仙という娘が通りかかり、「私の命で村の難儀が救われるのならば」と激流の中へ身を躍らせた。すると水の勢いが弱まった。そこで敗れた堤防も樋管も修理することができた。しかしお仙のなきがらはいくら探しても見つからなかった。お仙の霊をなぐさめるために矢島名物の大櫂の下へ石地蔵さまを祀り「お仙地蔵」と呼んで供養するようになった。矢島の大櫂は弥彦山の山頂からも見えるほどでお仙櫂と呼ばれるようになったが、大正9年に切られた。櫂の買い主の頭に大きな枝が落ちて死んだ。祟りではないかと言われた。お仙については①榎島の斎藤七右衛門家の娘という説②中郷屋の斎藤七右衛門(分家)という説③斎藤家の菩提寺の赤館の西福寺の仏様の化身という説④瞽女お仙という説「明日〇時ごろここを、ゴゼが通るので、その瞽女を人身御供に奉れば、水が弱まり、樋管の修築もでき、洪水は治まる」というお告げから。(ふるさとにしかわ町)

#### ・人柱おせん

西川が氾濫、善光寺樋管が抜けて堤防が十数間にわたって決壊した。徹夜で防水作業をしたが水勢激しく復旧ができなかった。通りかかった占い師が「人柱を立てなければ防げない」という。人柱の人選に悩んでいると、おせんという娘が現れ、自ら水戸口へ飛び込んだ。洪水はおさまり、容易に作業ができるようになった。堤防工事完成後に石地蔵を立て、村を水害から救ったおせんの霊を慰めた。(続・越佐の伝説)

#### ・お仙地蔵とお仙櫂

西川洪水の際、矢島河原の堤防が切れ、濁流は滔々として渦を巻き、近隣の村人たちも手の施しようがなかったという。そこへ妙齢の女性を通りかかり「私が人身御供となって水神を鎮めましょう」と名乗り出た。その名は「お仙」という。健気にも渦巻く激流に身を投げた。樹齢千年とも八百年ともうたわれた矢島大櫂は一名お仙櫂ともいい、大正9年伐採された。(矢島今昔)

#### ・おさき地蔵

享保年間(1716～36)頃、おさきという若い尼僧が日本全国のアゴナシ地蔵の参詣を志し、全国行脚していたが前野外新田の治右衛門宅で門付けをしているとき疲労で倒れてしまった。道家で介抱され、18歳で身寄りがないというので同家で養女にして養生させた。元氣を取り戻し、アゴナシ地蔵の巡礼に出かけた。何年か後、おさきが帰ってきたころ、西川前野堤が破堤し、中野小屋が水浸しになった。どうしても水戸留めができず、占ったところ、誰か一人人身御供にして切れ所に鎮めるなら水戸留めができるだろうということになり、おさきは自ら人身御供になることを申し出た。おさきが身を沈めると水戸留めは成功した。おさきの死を悲しんで街道わきの松の木の傍らにおさきの死体を埋葬。アゴナシ地蔵尊を建てた。これをおさき地蔵という。おさきが人身御供になった4月22日に祭礼を行う(新潟市史民俗編2)

#### ・芒々(ぼうぼう)

新川の俗称。五之上(潟東)から初めてこの地域に移転してきた人々が、見渡す限り草芒々のところだったのでこのように名づけた。文化年間に早通川沿岸の長岡・村上藩の村人によって、西川を底樋で横切らせ、内野の海岸砂丘を掘り割り、三潟の水を直接海に放流する排水路に改修された。これを新川(芒々→米里→新川)と呼び、のちに早通川全体をさす名称となった。(ふるさとにしかわ町)

#### ・新川

文政三年(1820)新川の開通によって三潟の悪水抜きが行われ、田潟と鎧潟の間に多くあった潟湖の一つ熊潟が干拓されてできた新田を熊潟新田と呼んだ。明治22(1889)に与兵衛野新田、貝柄新田の一部となって、熊潟新田村の呼び方は消えた。(ふるさとにしかわ町)

#### ・早通川の九十九曲り(ハヤドルの九十九曲り)

西蒲区升岡。百曲がりの淵になると大蛇(白蛇)が住みつくようになる、ということで九十九曲りにしたのだそうだ。淵は深く、空船は淵のツンヅル(渦巻)に吞まれるとなかなか乗り切ることができない。なぜこのようにたくさんの曲がりを作ったのかというと、上郷の大通川、飛落川、他の川々から流れ出る水が全部鎧潟に流れ込み、ひとたび雨風になると鎧潟があふれ、濁流が下郷の耕地に流れ込む。それを防ぐために御封印野(ゴヘンノ)というガツボやヨシなどを繁茂させた何十町歩も池沼(水遊場)を作ったり、川の曲がりを作ったのだ。そのために早通川岸辺の草や、川の中の藻なども刈り取らないようにした。鎧潟にあふれる水をなるべく時間をかけて緩和させようという苦肉の策だった。立場を逆にする上郷の人たちとはもめごとになった。(ふるさとにしかわ町)

#### ・水泡(ずぶ)出しの淵

西蒲区升岡。直角の大曲で激流が渦巻く中に時々ボンボンとツブ(水泡)が出ていて見るからに恐ろしかった。新川が掘られる前の話である。男の子が溺れ、大人

が潜ったり網をうったりしても見つからなかった。「本人が毎日使っていた飯椀でも汁椀でもそこに流して、お椀がその場所から動かないと必ずそこから上がるそうだ」というので椀を淵に浮かべた所、お椀は渦巻の中にくるくる回って離れない。見守っていると子どもが浮いて、お椀と一緒に廻っていた。子供の水死事故が続いていた。上層の天然ガスが自噴するものだった。升岡村、浦村の耕地をヅブ出しと呼称していた。(ふるさとにしかわ町)

#### ・御封印野

大歳神・御歳神・若歳神の三柱を祭ったお宮があり、7月12日になると善光寺から出向いてお祭りをしていた。御封印野の守護神である。御封印野(ゴヘンノ)とは、新川(早通川)の東にあって瀧東村の五之上部落の付近まであり、善光寺の田の中で一番遠かった。早通川に出て幾曲がりも曲がり、水門番(大筒の排水機場近く)に入るまでの距離もあり、竜か亀の仕業といわれるような、「舟が止まる」ということもあった。荷を積みすぎて舟の縁から水が入りそうなときは大人でも気持ちが悪く、御封印野は避けるようになった。明治初年、池田氏の先祖が居住を定めてから家が建ちはじめ、名前も新川部落として発展、御封印野のお宮を新川部落の守護神としてお祭りしたいという声が上がりはじめた。昭和29年に地域に譲り渡すことを決め、新川・善光寺両部落全員と、米里部落の者全員が一緒になって盛大な大祭を例祭日に実施した。(ふるさとにしかわ町)

年神・御年神・若年神の三神を祀る御堂も、度重なる水害のために流出し行方知れずになった。宮地に残った一本の栲を御神木としてお祭りを執行して来たが、新川を改修するにあたり、伐採された。その跡地は現在川底になっている。平成三年にその付近の新川に乗用車が転落し死亡事故がおきたことから「南無新川龍神観世音菩薩」の標柱を建て、近所の人たちが供物をあげお参りしている。(ふるさとにしかわ2)

#### ・鎧八幡宮

押付村の鎧八幡宮の創立は天喜康平(1053~1064頃)年間に奥州安倍一族の乱がおこり、天皇の命により奥州の賊を征伐するため、この蒲原地方を通りかかった源治



の諸将が、この押付八幡宮に戦勝の祈願をした古いお社の跡である。康平5(1062)頼義、義家父子は、安倍頼義、貞任を衣川・鳥海の柵で破り宗任を降伏させることができた。それ以来、押付八幡宮を鎧八幡宮と申し奉る。

俗説には黒鳥兵衛との戦勝祈願のために造営されたものとも言われ、確定は難しい。義綱は黒鳥兵衛を追討するためこの押付八幡様へ鎧を奉納し、戦勝の祈願をかけた。昔は現社地の西南方、三町ほどへだてた所に、本宮と称する社地があった。(ふるさとにしかわ)

#### ・越後善光寺如来様

毎年8月16日の開帳の日に「縁起の巻物」が読み上げられる。如来堂は専門の僧侶ではなく信徒の人々によって守られている。本尊は阿弥陀如来で左に観音菩薩、右に勢至菩薩。升瀧小学校あたりの広い地域に、大関阿波守盛憲という殿様が「田中城」を築いた。上杉憲政が北条にほろぼされ、長尾為景をたよってきた。その憲政に同行した武将の一人が大関だった。情け深い人だった。天守閣はなく、土や砂を高く盛り上げて見晴らしを良くし、まわりを沼で囲んだ自然の要塞だった。その殿さまに男三人女一人がいた。女の子は「桂姫」といった。桂姫の脇の下には蛇のウロコのようなものがあった。医者・占い師・祈祷師と手を尽くしたが治らなかった。母親が長野の善光寺に姫を連れて願をかけると21日間の日夜のお祈りが通じてすべすべとした肌になった。御礼参りにたびたび長野善光寺へ足を運んだが、道中、おいはぎや野武士が出て危険なので如来三体をいただいてお堂を建て、朝な夕なに拝んでいた。永禄年間(1558~1569)の争いのためお堂が焼け、如来さまの行方がわからなくなった。享保12(1727)に村松藩の鹿峠の秀翁寺の住職に夢のおつげがあり、「今ある如来様は越後善光寺へお返ししなさい」ということでお返しした。享保13(1728)3月、170余年ぶりで帰ってきて善光寺村の諏訪神社に如来さまが安置された。享保19(1734)仮堂を建設し、翌年そこに納めた。明和8(1771)高橋嘉左衛門が願主となり、如来堂が完成した。(ふるさとにしかわ町)

#### ・升瀧

大関氏の娘桂姫は蛇体で、三熱の苦しめで、九才の時に母につれられて長野善光寺に参詣し、この苦しみを治してもらおうように祈願し、満願の日に三尊仏を授かって帰って来たという。姫の死後、白骨を升ではかったところ一杯分あったといわれ、その升をすてた所を升瀧といい、その升の流れ着いたところが升岡であるともいわれている。(ふるさとにしかわ町)

#### ・大きな蛇

昔、木滑と井随のさかいのあいだに梁のような大蛇がいた。ある月夜の晩に木滑の佐助ろんの爺やが大きな水音に気づき外に出てみると、橋のあたりで大蛇が騒いでいた。水煙をあげて上の方へ行っては川を下っていた。

その頃、たんぼや沼に鴨がたくさんいたが、大蛇が鴨をとり、猟師も困っていた。井隨の重右衛門の直という人が大原のあらしというところで土手の葦を刈り寄せて山にし、その中にかくれていたところ、大蛇が川をのぼってきたので、近づいたときにズドンとうつと、大蛇が鎌首をもたげて睨みつけたが、力が尽きて倒れた。村人は稲積舟に乗せて大蛇を運び、焼いたところ舟いっぱいになった。それを焼いたところが骨が俵一つになった。この話を聞いた新発田の殿さまは重右どの直を「蛇は神さまのお使いだというのに、どうして殺してしまったのか」と叱った。大蛇の骨は井隨の神明様の前の地蔵さまのところへ埋められた。(月瀾の昔話)

#### ・馬堀用水

てんこうふき馬堀といわれた長岡藩馬堀村の庄屋、田辺小兵衛は、少しでも農民を楽にしたいと三根山藩和納村の西川から自分の村に水路を引く計画を立てたが許されなかった。上和納の代官、弥惣右衛門と七兵衛も村人に相談したが意見は二つに分かれて紛糾した。小兵衛は私財をなげうって用水の計画をした。幕府に許可なく水路を掘ったため、殿様の命を受けて武士が闇夜の水門に細工、通水しないようにした。策略にはめられ、はねられた小兵衛の首が水門の中へ入り塞板をくわえて浮き、馬堀用水に水が流れた。(岩室村史)

#### ・首祭り

馬堀の久福寺で毎年8月25日ころに首祭りを行う。名主であり、義人である田辺小兵衛俊定の徳をたたえ、霊を慰めるため。元和元年(1615)馬堀生まれ。24歳の時に久福寺を建立。馬堀は土地が高く水利の便が悪いため、日照りや水害に災いされ凶作に見舞われていた。小兵衛は本町村西川土手から馬堀まで用水路を掘る計画を立てる。屋はスキの穂を結んで、夜は線香の火を目印に測量。長岡牧野藩主に着工許可の願書を提出して五年間にわたり繰り返し陳情し、許される。工事は正保元年(1645)完成。しかし藩へは願出たが幕府には届け出ておらず、役人の怒りを恐れて小兵衛に入牢を申し付け、水門を閉めたまま打ち首ということになる。処刑の日(正保2(1645/7/25)、小兵衛の首は水門の扉を



くわえて舞い上がり、水が堰を切って流れ出し、多くの水田がよみがえった。この出来事に幕府も領主も後の祟りを恐れて用水の使用を認める。

漆山をはじめ、近郷の水田数百町歩が恩恵を受け、水害防止にも役立っている。寛延四年、牧野藩主は小兵衛の追善供養のため長恩院に大石塔を建て、大正年間には小兵衛に従五位が追位になった。(越佐の伝説)

#### ・ドン地の雨

用水江筋の江丸普請や、藻刈り普請をすると翌日必ず雨が降るといふ。その昔、河間と羽黒との間に水争いがあり、羽黒の人が殺された。下手人が判らないので河間の庄屋が責を負って生き埋めの刑に処せられることになった。その時三ツ門の善太郎という人が庄屋の身代りとして生き埋めの刑を受けた。河間集落ではその身を犠牲にして刑を受けてくれた善太郎の気高い善意に報いたいとの願いを込めて、兵四郎田耕地の一部の地籍を三ツ門村に変更して、ここに一体の地蔵尊を建立して身代りとなった善太郎の霊を慰めた。オコリにかかって熱のひかない時や、歯の痛むときなどお詣りすると霊験があるといわれている。殺された羽黒の人のための雨か、身代りとなった善太郎のための涙雨か、ドンチの雨は今でも必ずといってよいほど降るといふ。(「中之口村誌」昭和四十四年)

#### ・善光寺の狐

新川改修前の御封印野あたり一帯はヨシアゼといつてヨシばかりだった。そのため狐がたくさんいて大正の初めころまで化かされた話があった。改修後は狐もいなくなった。(西川町史考)

#### ・団次郎堀

嘉永三年七月、一月続く雨に地水があふれて濁となった。植えた稲が腐りかけ、下江を持たない井隨のものは五の上の堤を破ろうとして鍬代わりに加茂紙を巻いて五の上の堤を破ろうとした。五の上の者は、堤が破られては大変と、竹やりで応戦する。その争いで井隨団次郎が口の中を突かれて命を落とした。井隨の者は泣く泣く帰るが、後にお上がこの事件を取り上げ、井隨に一本の下江を許す。井隨の者は犠牲になった団次郎の名をつけ、下堀を団次郎堀と名づけた。(潟東村誌)

#### ・新太郎どの矢川改修

鎌倉時代、源頼朝の弟、三河守範頼は弥彦庄石瀬を支配しており石瀬の娘を奥方とした。奥方は石瀬の前と言われた。範朝は十宝山に銀山を開発し領民をうるおした。範頼が伊豆修善寺で亡くなると、石瀬の前は郎党を連れ、石瀬で暮らした。その子孫、新太郎は鎌倉殿と呼ばれ人望を集めていた。新太郎は石瀬組18村の庄屋、三根山藩船越組、和納組庄屋などに頼まれ矢川の改修に乗り出した。石瀬代官岡室源助と交渉したが認められず、自力で改修した。十宝山から流れ矢川に連なる弘川の上流に堰を作り、水を貯蔵して堰を破り泥と一緒に排出して積

泥を利用して矢川土手を改修した。幕府の銅山に出稼ぎした農民たちを集め、廃坑になっている銅山に入り、貯水の底にあたる部分を銅山の坑道とつなぎ、銅山のムカデ模様の石を掘り、坑道から水底へ投げ落とした。新太郎は堰の強さと貯水量について熟知しており、杖で小さな穴をあけて「明日の昼ころ堰が破れる」と告げ、計画通り大量の土砂を矢川筋まで運び、蛇行する流れを変えてたくさんの開田もできた。矢川改修と称して代官所に見つからないようにむかで石（銀）が拾い集められ、山師に売って金にし矢川の改修に使われた。幕府の銀を盗掘したことを新太郎は自ら代官所に申し出、祖先の眠る古墳の上での切腹が許された。新太郎は長岡藩主に矢川の水を日本海に放流するという絵図面を長岡藩主に通託した。享保時代の出来事である。（岩室村史）

#### ・楊枝湯

樋曾に惣左衛門という馬を飼うことがうまい百姓がいた。うわさを聞きつけて都より馬喰が訪ねてきて、高値で買った。馬喰が金池の宿に泊まると、夜中に馬が楊枝湯で月明かりの中波を立てて泳ぎ回っているのを見た。それで池月と名づけた。弥彦の猿ヶ馬場に差し掛かると、池月が一声高く鳴いた。すると弥彦山の絶頂より墨を流したような黒雲が湧きおこりどこから来たのか漆を塗ったようなたくましい馬が現れた。馬喰は磨墨と名づけ、二頭は鎌倉幕府の手に入り、宇治川の戦で有名な先陣争いに活躍した。（岩室村史）

#### ・田中伊八

天保年間。伊八は造り酒屋を商売としていた。大酒のみで一日に二升飲み、酒顛童子「酒顛の伊八」とあだ名された。同村の者といさかいを起こし、代官所に訴えを起こした。しかし、代官所の座敷の床の間にかかっていた額を見て改心、慈善事業に一生を捧げた。その書は「人の短をいうなかれ、人の長を忌むことなかれ、人に施すも慎んで念ふことなかれ、施しを受けては忘ることなかれ、世誉慕ふに足らず」というもの。伊八は独力で鎧冴周りの水田の改善、開墾作業を進めた。天保8（1837）の大飢饉の時には自分の家財道具、衣類から帯まで売り払い、百姓の救済に力を尽くした。書もよくし、雅号を「墨池軒」と称する。48歳で死亡した。（ふるさとにしかわ町）

#### ・曾根神社

永禄3（1560）の頃、上杉輝虎公は直江山城守に命令して西川を掘らせ、その竣工の際に信州諏訪の湖水から神水を拝受して通水式を行い、諏訪の狼の分霊をいただいて現在のところに水守神としてお祀りをしたという。その際の村名を曾根村とし、見帯にあった神社を現在の地に移転したという。（ふるさとにしかわ町第二集）

#### ・下山神社

永禄年間、西川発掘の際、現大字下山観水洞の水守神として鎮座。文政2年、本殿ならびに拝殿増築、本村の

産土神にして諏訪神社と称した。（ふるさとにしかわ町第二集）

#### ・曾根の大ミミズ

町うらのくぼんだ池にごみを捨てて数十年間、掃除もしないところがあった。ある年の六月、しとしとと雨が降って蒸し暑い夜のこと、青白い光を発するものが現れてはい回った。長さ二尺ばかりの大ミミズだった。（ふるさとにしかわ町）

#### ・地名のいわれ

曾根…曾根は、ソラス（荒らすの意）の転化したもの  
押付…西川の流れによって堆積した砂を汰上げ、押付けた地形名であると思われます。

西汰上…にしゆりあげ。ゆすって上げるの意味。西川の氾濫源で、自然堤防上に集落が作られたことからついた地名。新潟市の寄居も汰上の変化したもので、汰上から移転して行った人々によって開発されたという。

川崎…昔は河崎郷屋村と呼ばれていた。興野、郷屋、小屋のつく地名の開発は、江戸時代より前の鎌倉、室町時代になる。西川の流れの鼻ということで河崎と名づけられた。

槇島…西川が蛇行、して蛇がとぐろをまいたようかっ  
に川の流れている所にできた島といった意味で名づけられた。（ふるさとにしかわ町）

#### ・蛇根城の池

昔、横田切れと言われる大洪水が起きた。このため蛇根城の池も氾濫して溢れ、角田浜の前原一帯が泥の海となってしまった。その時、池の中から小山のような巨亀が現れて濁流に流され、海へと流れ出た。次いで大きな法螺貝が現れ、角田山へと向かったと言う。（新潟県伝説集成下越篇（平成8））

## 4. 河童の伝説



河童は全国的に伝えられている、水辺に棲む妖怪である。川や潟の多い新潟にも、たくさんの河童伝承が残っていた。信仰の対象としての河童、超自然の存在として人と関わり合う河童。いろいろな性格を持つが、新潟の河童は人間と意思の疎通ができる。せっかく関わりを持

ちながら、人間側の対応の間違い（お礼の魚をかけてくれる木の鉤を河童の嫌いな鉄の鉤に変えてしまう）により、河童との関係が絶たれてしまう。河童が自然界から遣わされた存在であるとしたら、悲しい話である。

#### ①河童と植物

河童をしばりつけたという松や、河童が植えたという藤の伝承が残っている。これらの植物は神聖な御神木のような扱いであったと思われる。大きな木が育つところは地下に豊富な水脈がある。河童は水神であるという考えと結びついているように思う。

#### ・河童の杉（南区）

中之口川に棲んでいた河童が、ある夏の夕暮れに大字諏訪の木の鎮守諏訪神社の境内にいたところを捕らえられて杉の木に縛付けられた。河童が涙を流し許しを請うたので縄をといてやった。河童は、この杉が生存している限り村人も水難にあうことはない、と立ち去った。それから中之口川で水死する人がなくなった。杉の木は河童の杉と言われ、神木と称して崇敬した。（現「白根神社」越佐の伝説）

#### ・河童松の話（南区）

西萱場では畑のキュウリが荒らされて困っていた。ある日、髪をバラバラにした子供のような小さい動物が一生懸命にキュウリをもいで食べていた。これを生け捕りにして老松に縛り付けておくと動物は苦しそうに手を合わせ、自分は中之口川に棲む河童で、この松の木がある限り西萱場の子供はとらないと謝った。河童を逃がしてやり、松の木は河童松と呼んでいたが、昭和27年に伐採され月潟中学校の校舎建築の材料となった。階段部分が河童松で作られている。（越佐の伝説）

中之口川は直江山城守が天正十年から慶長二年まで十五年かけてほった。中之口川は水の流れが早く深さも深く、本流とのわかる金前（もとの古池村）は船乗りたちの難所として有名だった。下流も流れが強く、流れがぶつかる月潟と西萱場のあたりはとても流れが強く、深くて渦を巻く難所だった。舟乗りたちは念仏を唱えながらこの難所を通った。深みにはまって亡くなる子がいると「河童に捕まった」と言った。西萱場の源右衛門さんの家の前に三百年ほどたった大きな松の木があったが、この松は「河童松」と呼ばれた。ある年、キュウリが毎日のように盗まれ、皆は畑の見回りを始めた。源右衛門さんの家の畑で動く者がいたので捕まえると河童だった。家の前の大きな松の木にしばりつけると泣いて命乞いをした。許してやると、この松の葉が青いうちは畑を荒らさない、村の子どもはとらない、と約束した。しかし、この河童松は昭和二十七年月潟中学校を作る時に伐採されて用材にされた。中之口川も分水ができておとなしい川になった。（月潟の昔話）※中学校の校舎は昭和39年の新潟地震で被害を受け、昭和42年鉄筋校舎に建て替えられました。

#### ・旗屋の観音堂藤（西蒲区）

300年前、田中六郎衛（田中平六の本家）の主人が西川で馬の体を洗い、帰って餌をやるとうすると、馬桶がひっくりかえしてあり、起こすと小僧のような河童がかくれていた。「命を助けてくれるなら永久に旗屋の水には人がおぼれぬようにする」「その証拠に藤を一本観音堂の敷地に植えます」といって河童は命を助けてもらった。（西川町史考）

元禄中期、旗屋の百姓田中六郎兵衛が、当時裕福と言われた馬を飼っていた。馬を洗った後、足の疲れをとってあげようと馬を川に入れて冷やしていた。自分も川原で一服し、馬を川から上げて帰りかけると馬の歩き方がおかしいことに気づき、見てみると馬の尻尾に河童が一匹ぶら下がっていた。六郎兵衛が騒ぐと人が集まり、殺した方がいいのではという河童は「かんべんしてくらっしえ。こんどしねえすけ逃がしてくらっしえ。たのむすけえ」としきりに助けを求めた。助けてもらえれば旗屋りの子どもたちが溺れないように守る、ウソをつかない証拠に観音様の境内に藤の木を植えていくという。逃がしてやると藤の木が植えてあり、その後川でおぼれるものがなくなった。「河童のおかげ」ということで藤の花の咲く6月18日（観音様の命日）にお祭りをして河童の話をするようになった。また、この藤の木のこぶを煎じて飲むと神経痛やリュウマチが治るとお告げがあったという評判が伝わり、旗屋の観音藤が有名になった。観音藤は約五十年前とその後の台風で涸れたがその根から出た藤で藤棚が作られている。西川で泳いだが、泳ぎを切り上げる時に「オサメのカンジク（最後に）亀にも、河童にも命をとられませんように。ように。」と唱えてから飛び込む習慣があったそうである。（ふるさとにしかわ町）

#### ②河童と薬

河童から薬を与えられるという伝承は各地で聞ける。蒲原宏「河童伝授の骨つき薬とは」（高志路359）によると、「『河童から授かった』と称すれば避難、怨嗟も少しは軽く、薬の神秘性は患者の医師依存心理を高めることにもなる」としている。なぜ河童であったのか、蛇や亀などと違い、人と言葉を交わし、関わりを持つところが河童の特徴である。

#### ・勘左衛門の薬（江南区）

江戸の終わりから明治の初めの頃、楚川の大谷勘左衛門の祖先が馬を川で洗っていると馬の足に河童が食いついていた。そのまま馬を岸にあげ、河童を引き離して折檻すると河童は薬をやるから許してくれと懇願した。大谷家に伝えられた薬はカワネ（コウホネ）を焼いて、これに何か一品混ぜて作るものだったが当主がそれを伝えないまま死んでしまった。打ち身や骨折の時のひやし薬として効能があった。（新潟市合併市町村の歴史 研究報告）

### ・河童直伝の傷薬（江南区）

ある年、妙齡の婦人ばかり15人も溺死した。河童が婦人を狙うのではないかと噂された。その頃の大庄屋、曾我某の妻が美人で武芸にもたけていて一計を案じた。ある夜、妻が厠に入ると何者かが臀部をなでまわした。その手をつかんで召使の者を呼び、短刀を取り寄せてその手を切った。色青く粗剛の毛が無障に生じている何獣のものとも鑑定がつかない化け物妖怪の手であったので箱に納めた。その晩、縁側で月を眺めていると16,7歳ほどの美しい服を着た容貌もとても麗しい青年が両手をつき、さめざめ泣いて訴えた「私は年来この阿賀に棲む河童であるが、あなたの容色に恋慕し不敬を働いて手を切り取られた。片手では水中を泳ぐにも泳がれずただ死を待つのみである。こののち阿賀よりほかの川に住み替えすべければ昨夜の無体を許して腕を返されたし」。切り取った手など返しても元に戻らないだろうという、河童は「切り傷の名薬があり、それを伝授する」という。河童は妻に薬を伝授し、腕を元どおりにして去った。曾我某の家には切り傷の妙薬として代々無代で施与して遠近に知られていた。（越佐要覧）

### ・横堀家河童相伝の名灸（西区）

須賀（坂井輪村）の横堀氏は、昔西川の堤内にキュウリなどの野菜を作り、食べ余りの分を新潟の朝市に出荷していた。ある朝、河童がキュウリをもいで食べていた。馬槽をかぶせて生け捕りにすると、どんな難病も忽ち直る名灸を伝授するからと命乞いをした。その後、横堀家では当主が施療を行い、昭和32年8月20日には村内の人を招待して「河童さま祭」を挙行了した。（蒲原の民俗）

文化十五年新川放流後も下流境村、浦潟、徳の潟、木ふれ潟などが残り、信濃川の氾濫の度ごとに湛水に悩まされていた。須賀のぎざいみどん（儀右左門・横堀家…寛文二年から続く家）は河童から教わった灸で大勢の村人の病気を治して喜ばれた。ある時、河童が胡瓜畑を荒らしていた。馬槽をかぶせて生け捕ると、河童が涙をこぼし手をすって命乞いをした。四日ほどかまわなかったがあまり願うので馬桶からだしてキュウリを一杯食べさせると元気になり、手取り足取り灸のつばを教えた。すっかり教え終わると西川に姿を消した。「須賀の歯臭の灸」といって歯槽膿漏に大変効いた。（にいがた夜話）

### ・カッパと五香（西蒲区）

舟戸の村の前を流れている川を舟戸川と呼んでいた。河童がいていたずらや悪さをした。五香屋の人が川で馬さを洗っていると河童が馬を川へ引きずり込もうとして足に抱きついた。馬は暴れて馬屋まで逃げ、河童は飼葉桶の下に隠れたが見つけれられ、五香と水をさずけて命乞いをした。それで五香屋というようになり、五香屋の井戸はどんなにひでりがきても水が涸れないという。（巻町史民俗）

### ③河童と契約

河童を助けた礼に、薬ではなく魚を届けるという話も各地で聞くことができる。金気を嫌うところは蛇に通じているように思えるが、決して河童を追い払おうという気持ちではなく、人側の過失で河童は来なくなる。

### ・河童の詫び証文（北区）

濁川地区、阿賀野川で水浴びしていたものがよく河童のため溺れ死んだので、池田作右衛門が河童を捉えると河童は命乞いをして柿の葉に詫び証文を書いたという。池田家の縁の下のカメの中に入っているはずだという。（新潟市史民俗編Ⅰ）

### ・小口の河童（秋葉区）

間忠右衛門が飼馬を能代川へ引いていき、下僕が馬を洗っていると、河童が馬の尻を抜こうとしていたので石を拾って馬の尻にあてると河童は「この馬の尻は石ですね」と言った。あきらめきれない河童は馬小屋へ忍び込み、下僕に見つかると命乞いをした。知らせを聞いて駆け付けた忠右衛門は「命を助けてやるから小口の人の命をとるんでないぞ」と契約証文を書かせた。この証文は柿の葉に書いたという。文字がはっきりしていないが、水中に入れると文字が鮮明に表れたという（お礼の魚の話は前述と同様）。それで間家は河童の恩人と解され、間神社は水難除け（河童除け）の神さまと崇められるまでに至った。（高志路359「小口の間神社とカッパ伝説」）

### ・中之口の河童（南区）

白根町中之口川の淵に棲んでいる河童が川で水泳をする者の肛門を抜き取ることが年々多くなり、水泳の熟練者が河童を捕まえようとしたが逃げられ、股間にキュウリを挟んで（禪に括り付けて）泳ぐとキュウリに手を伸ばしてきたのでその手をつかんで水中より引き上げ鎮守の鳥居に縛り付けた。河童は涙を流し、許しを請うので縄をほどいて放してやると、水死者が出なくなった。（越佐要覧）

### ・河童祭（西蒲区）

針ヶ曾根のキュウリ畑が河童に荒らされて困っていた。ある年の7月1日、畑に出てきた河童が生け捕りにされた。二度と畑を荒らさないからと手をついてあや



まった。部落の人たちは、子どもが川で水遊びをするときにいたずらしないこと、畑の作物を荒らさないことを条件にして許した。次の年から7月1日を河童祭りといって針ヶ曾根の各家庭では赤飯を炊いてキュウリの漬物を添えて川に流し、家でも赤飯を炊いてキュウリの漬物を添えて子供たちの水難事故のないことを祈っていた。(中之口村史)

#### ④その他

そのほかにもいろいろな河童がいた。毬に化けたり粘土に化けたりと、水神のような性格が消え、ただ恐ろしいだけの存在としての河童もいた。「シリゴを抜く」というのは、死んだ人は肛門が開くからだろうといわれている。

#### ・ドンチ池の河童の話 (西区)

昔からドンチの河童は糸毬に化けて来るのだそうだ。道に糸毬が一つ落ちていて、村の子どもが見つめて「こんげとこに毬がぶちゃられてた」と拾おうとするとコロコロと転がっていき、止まったり転がったりを繰り返して、いつの間にかドンチの池まで導かれていく。子が池に気づかず毬に近づくと、黒い毛むくじゃらの手が出ていきなり子の足をつかんで池の中に引きずりこみ、尻こ玉を抜かれた子はその後、池に浮くという。

谷内の村さの さらし屋のお花  
頬べたに紅つけ どこさへ行きやる  
嫁ご どこどこ どこさへ行きやる  
中権寺へいぎやる  
中権寺 どこどこ どこさへいぎやる  
紺屋どんにいぎやる  
紺屋どん兄さは おなごがござる  
兄さ 兄さにおなごがいれば  
弟(おじ) さにいぎやる  
弟さ 弟さにゃ 女(おば) さがござる  
女さござれば ドンチの河童  
河童おっかない いぐなやお花  
いけば尻こ玉 のかれるお花  
お花 泣き泣き 谷内村帰る  
と手毬唄にも歌われているという。(にいがた夜話)

#### ・河童 (江南区)

小阿賀野川、江南区割野のチンショ(沈床か)に河童がいるといわれた。そこに入ると「シリゴを抜かれる」といわれた。(新潟市合併市町村の歴史 研究報告)

#### ・チンショの河童 (江南区)

信濃川の天野地区のチンショ(沈床)の主だった大蛇が佐潟に移ってから、夫婦の河童が住むようになった。そのため、子供の魚捕りや漁師のイグリ網はチンショを避けた。(新潟市合併市町村の歴史 研究報告)

#### ・沢海の河童 (江南区)

沢海の河童は性質が悪く、いろいろなものに化けて人を水辺に誘った。きれいな櫛に化けて川を流れ下ったり、

粘土などに化けて不意に人を襲った。(横越のむかし語り)

#### ・天王様 (秋葉区)

荻島の天王さまは小阿賀野川と能代川との合流点で溺死者が多く、これは河童の仕業だと言われた。安政5年10月29日宮を建立、祭礼は6月5日で参詣者は胡瓜の初成りを供え、除難の祈りをこめた。河童鎮めの神である。(蒲原の民俗)

#### ・河童の話 (西区)

中野小屋で法事に行った和尚さんが、日暮れに川の土手の道を通ったら道の真ん中に大きな藁ニオが積んであり、通れなくなっていた。おかしいと思い、度胸を決めておしっこをすると、河童が逃げていき、ニオも消えていた。(新潟市合併市町村の歴史 研究報告)

#### ・河童の話 (西区)

新川の往来橋の下あたりと、もう1か所に河童がいるといわれた。河童にへそを取られると沈んでしまって浮いてこないという。シジミ採りに出かけた少女が帰ってこなくなり、河童にとられたといった(新潟市合併市町村の歴史 研究報告)

## 5. 終わりに

昨年度から、書籍に残る潟の伝承を調べ始めたところ、潟だけではなく川、堀、樋管、湿地なども潟につながる伝承ではないかと思い、拾い集めてみた。潟環境研究所の協力研究員となり、改めて新潟の民俗を考えたところ、人々が、どんなに辛くとも自分が生きている土地と、いかにうまくやっつけようかと考えて工夫している姿が見えてきた。どんなに懸命に頑張ってもどうしようもないとき、目の前の人を助けられなかったとき。そんな時、人は神仏に祈り、荒れ狂う自然を鎮めようとし、感謝したのであろう。そして自分の気持ちも落ち着かせようという真摯で誠実な思いも感じた。時代の変遷により、その思いも変化してくる。神仏が人の願望の変化と共に動き回り、姿を消したりするのも興味深かった。今回、伝承とは毛色の違う内容のものも紹介したのは、そのような神仏の存在を知っていただきたいからである。このように伝承を集めていると、少しでも暮らしを良くしたいという思いから計画したものが、とんでもない方向に進んでしまうこともある。その一つが新発田藩の掘割である。もし、阿賀野川の河口が信濃川と合流したままだったら、まったく違う新潟になったのだろうかとか複雑な思いになった。

#### 〈参考文献〉

味方村誌 平成12 / あったてんがのいばらそね 平成13 / 岩室村史 昭和49 / 岩室村村誌 昭和8 / 姥ヶ山の往昔散歩 昭和60 / 海の越後佐渡 大正15 / 越後における真宗の展開と蒲原平野 2013 / 越佐の伝説 昭和

42／越佐の伝説 昭和48／越佐の伝説 昭和48／越佐伝説めぐり 昭和62／越佐要覧 昭和4／岡方の伝承～今昔あれこれ～ 平成16／潟東村誌 平成元／亀田町史 昭和34／蒲原の民俗 昭和45／黒埼物語 昭和51／（黒崎町史資料編6 平成9／こすど風土記 昭和45／笹神村史4 平成14／白根郷治水史続編 昭和28／続・越佐の伝説 昭和47／月潟の昔話 昭和56／月潟村誌 昭和53／豊栄市史 平成11／とよさか歴史散歩 第二版／とよさか歴史散歩3集 平成16／鳥屋野地区の今昔 昭和55／中之口村誌 昭和44／新潟県伝説の旅 昭和62／にいがたふる里さんば話 平成5／にいがた湊祭 昭和42／にいがた夜話 昭和62／新潟県豊栄市調査報告 1983／新潟県伝説集成下越篇 平成8／新潟古老雑話 昭和8／新潟市合併市町村の歴史 研究報告 昭和60／新潟市史民俗編2 平成6／新潟市史民俗編I 平成3／新潟市の文化財 平成14／新津市史 平成3／新津市史 平成3／西川町史考 昭和48／ふるさとにしかわ町 平成3／ふるさとにしかわ町2 平成6／ふるさとの地名亀田昭和57／ふるさとの地名亀田昭和57／ふるさと坂井輪 平成13／ふるさと坂井輪二集 平成17／北越奇談 文化8／巻町史民俗 平成4／大形のむかし 平成28／中蒲原郡誌 大正7／中蒲原郡誌 大正7／越佐の伝説 昭和42／中之口村史 昭和62／矢島今昔 昭和50